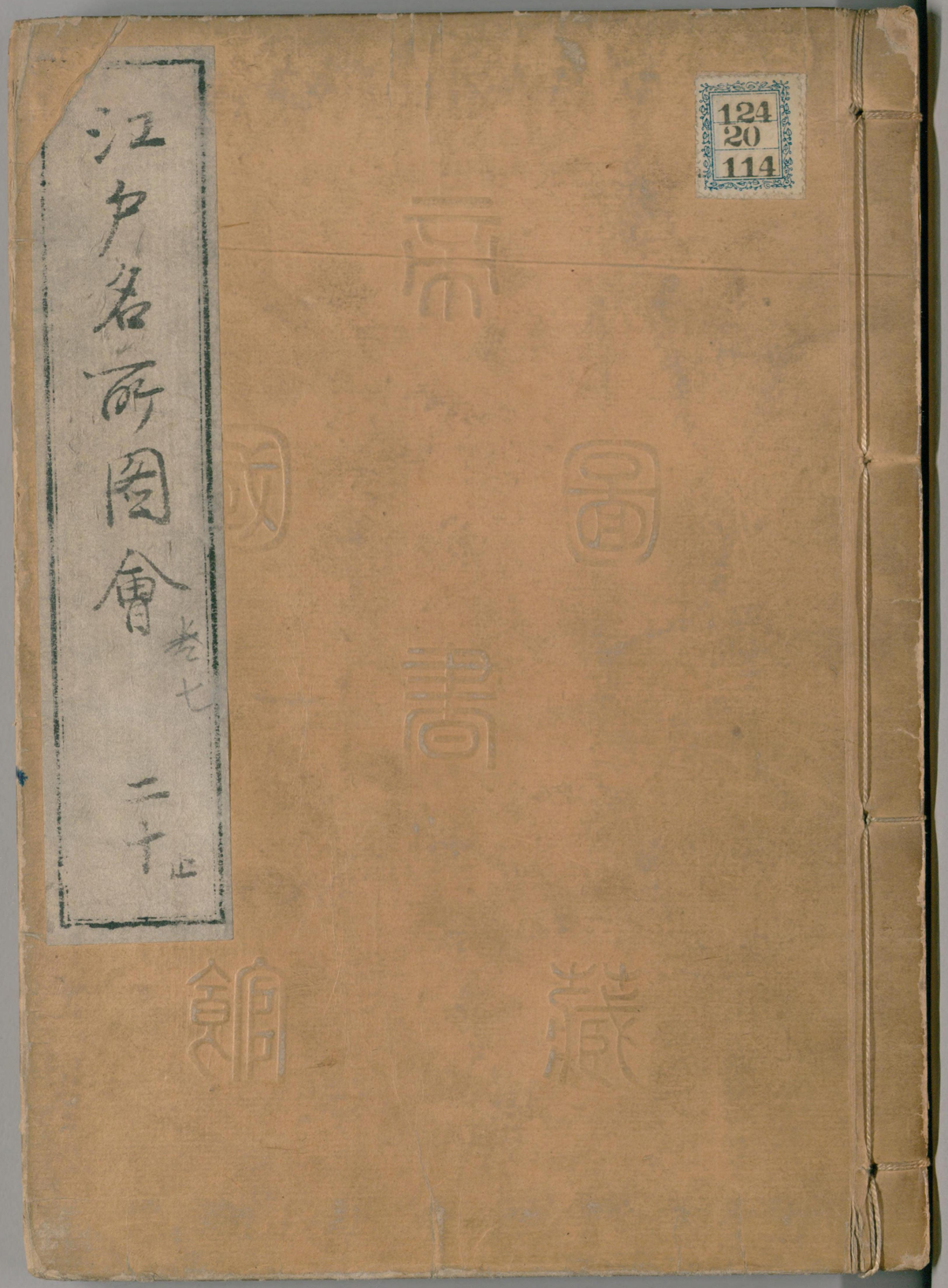


タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸名所圖會 十二

124
20
114

東京圖書館

| 和書門 | 地理類 | 別 | 六 | 二〇 | 二 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| | 礼 | | 架 | 號 | 冊 |
| | 函 | | | | |

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

東京都立中央図書館

故柳原芳雄氏寄贈

新宿渡口

松戸街道

川の中に亀有と云ふ所を流る其中にて鯉魚を產す尤も美味あり

小林蔵書

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

中川

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

夕顔觀音堂　新宿の渡口より半道ばかりを西北の方中川の堤より傍く飯塚村とぞいへる聖觀世音八金像ぞしるく安き相侍り此地ハ昔荘官関口氏此地に就く熊野権現及び水神をのぞまつりす別よ慈覚大師よ刻の觀音の木像を以て龍前ぬ墳墓の旧址なりと往古関口氏此地よ住せし翁温素より信心やく目蓮の弘法よ帰依ありし砌此叢祠其社前よ老松と擾樹の二樹の雙立るを等の社を創建ありと云くされとも深く内龕よ秘しそ拝ぬ事ハ堅く禁ぜり半道ばかりを西北の方中川の堤より傍く飯塚村とぞいへる聖觀世音八金像ぞしるく安き相侍り此地ハ昔荘官関口氏此地に就く熊野権現及び水神をのぞまつりす別よ慈覚大師よ刻の觀音の木像を以て龍前ぬ墳墓の旧址なりと往古関口氏此地よ住せし翁温素より信心やく目蓮の弘法よ帰依ありし砌此叢祠其社前よ老松と擾樹の二樹の雙立るを等の社を創建ありと云くされとも深く内龕よ秘しそ拝ぬ事ハ堅く禁ぜり



あり春夏ハ枝葉焦悴秋冬ハ翠色を増す人以ての奇ありとぞ又此樹間時とくく光を發しぬ或ハ龍燈の掲よかくをとぞ寛文八年戊申関口氏此地の醫生深谷氏と共よ相謀くく此樹下を堀しに十二の佛具を得たり是必古時此地よ有名の寺院ありしならんと云く竟よ同年六月六日謹く猶此土中を堀しに金像の大非の像一軀を獲たり佛像背面よ弘長二年二月仍直ゐ造と刻せり深谷氏の家よ移し假ゐ佛壇よ安き相好端厳実よ希工の所造よ似ず然よ其前宵深谷氏老翁媼共よ夢の中よ此地の縁起よ載ると異ことなく何の応ずる所あるを以くく竟よ此地を開く草堂を営み此霊像を迎へ安置ぬ事ハ世よ多く観音の像ハ孰れの中よ出現しぬるも必ず七字を刻せり紫式部の念持佛なりとも伝ふ此地の縁起よ載ると異ことなく何の応ずる所あるを以くく竟よ此地を開く草堂を営み此霊像を迎へ安置ぬ事ハ世よ多く観音の像ハ孰れの中よ出現しぬるも必ず七字を刻せり紫式部の念持佛なりとも伝ふ此地の縁起よ載ると異ことなく何の応ずる所あるを以くく竟よ此地を開く草堂を

猿俣新宿より北の方の邑名なり　葛西

神鳳抄曰　下總國　猿俣御厨　百八十丁　新御厨　在之　云云

和銅寺廃址同所よあり　佛生山と号しる真言の古蓮ゆくく

和銅年間の草創ありしと云伝ふ中古迄も伽藍巍峩りしぶ

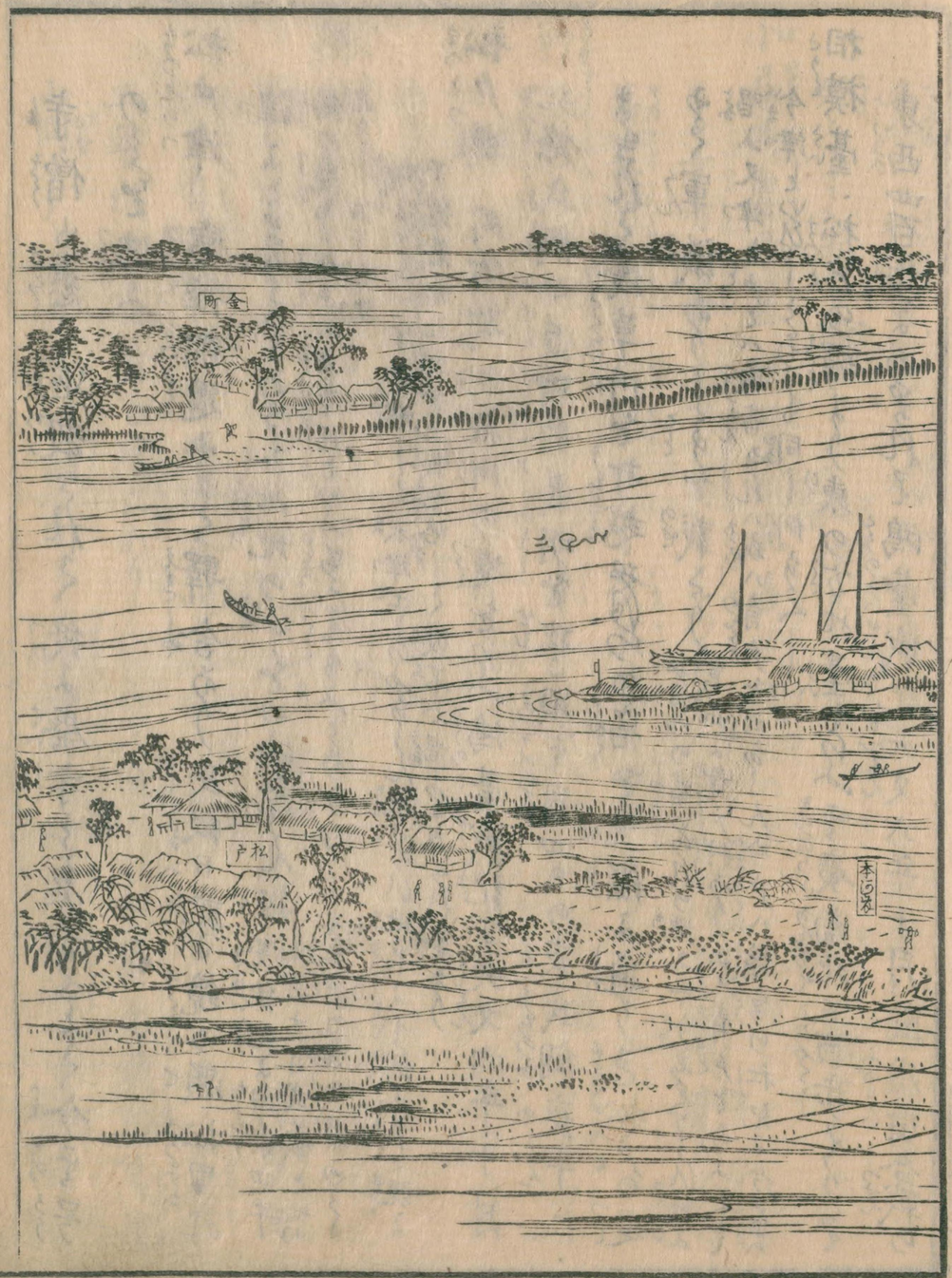
天文六年國府臺合戦の時兵火のあふ灰燼となりく

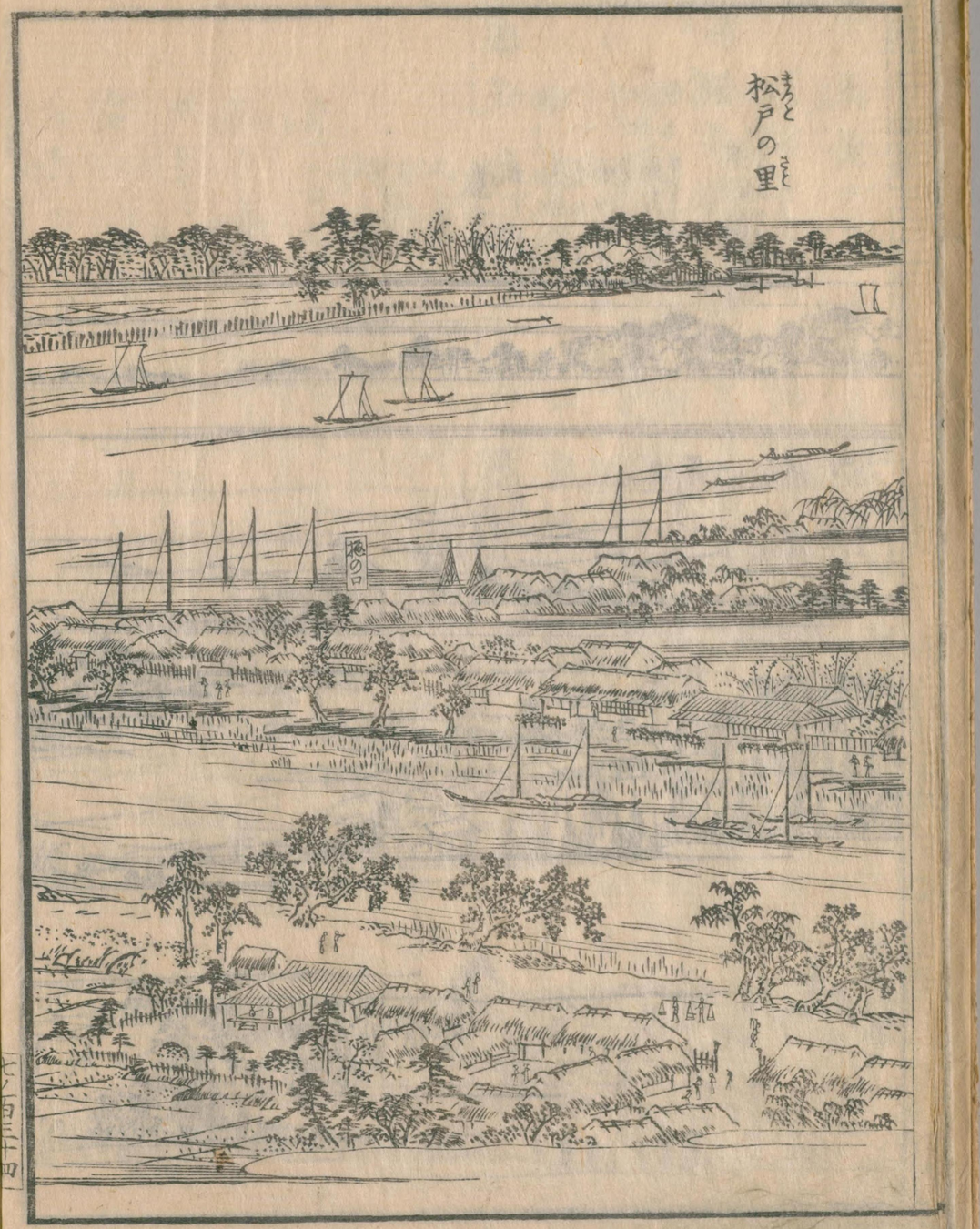
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　　ガラス使用

# 半田稲荷社

東葛西領金町にあり
来由ハ洋拾遺に紀すへし

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

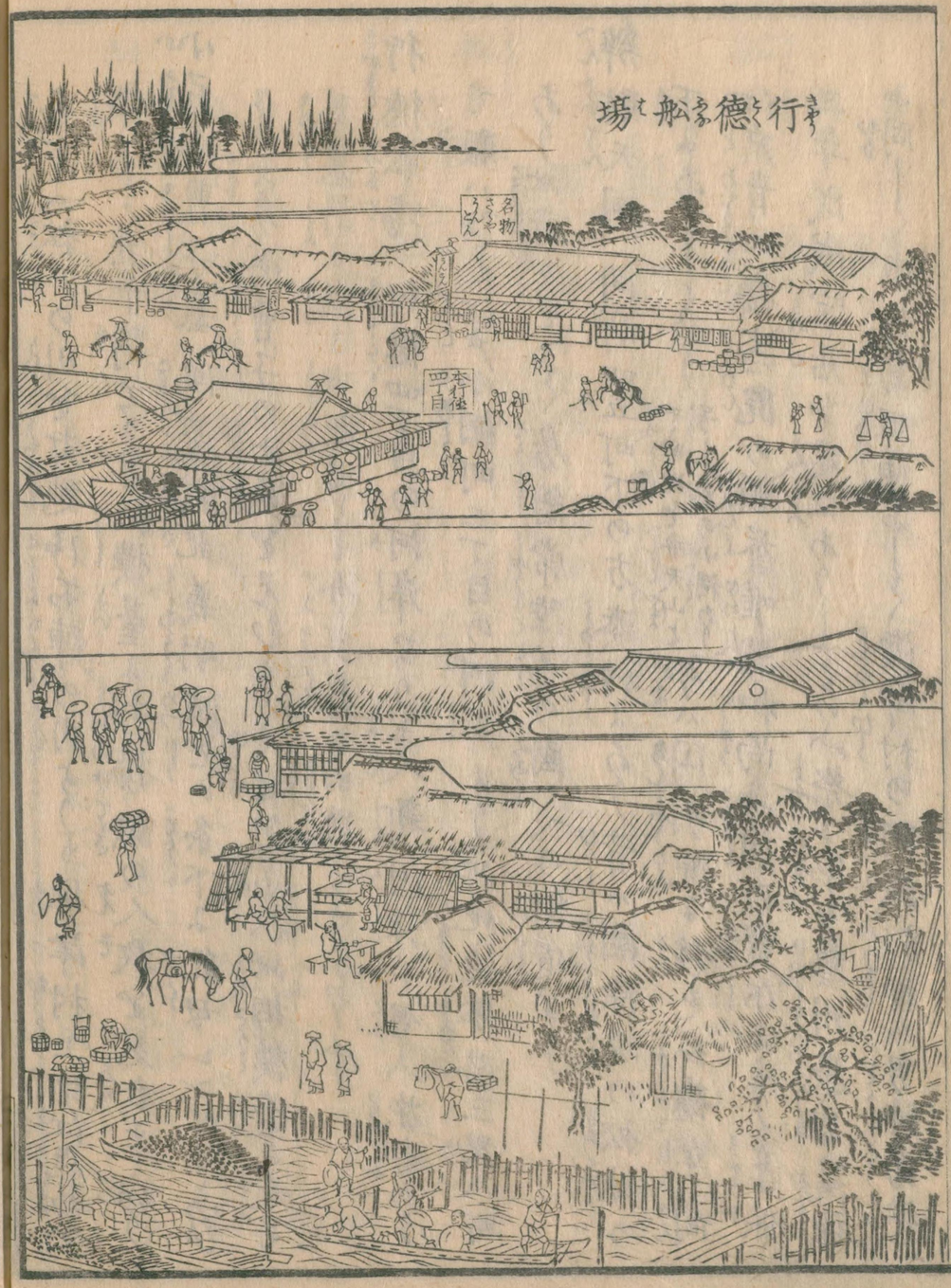
寺僧も悉く退散されく終ゟ廃寺となりくくく今ゟ号のくくを伝ふ

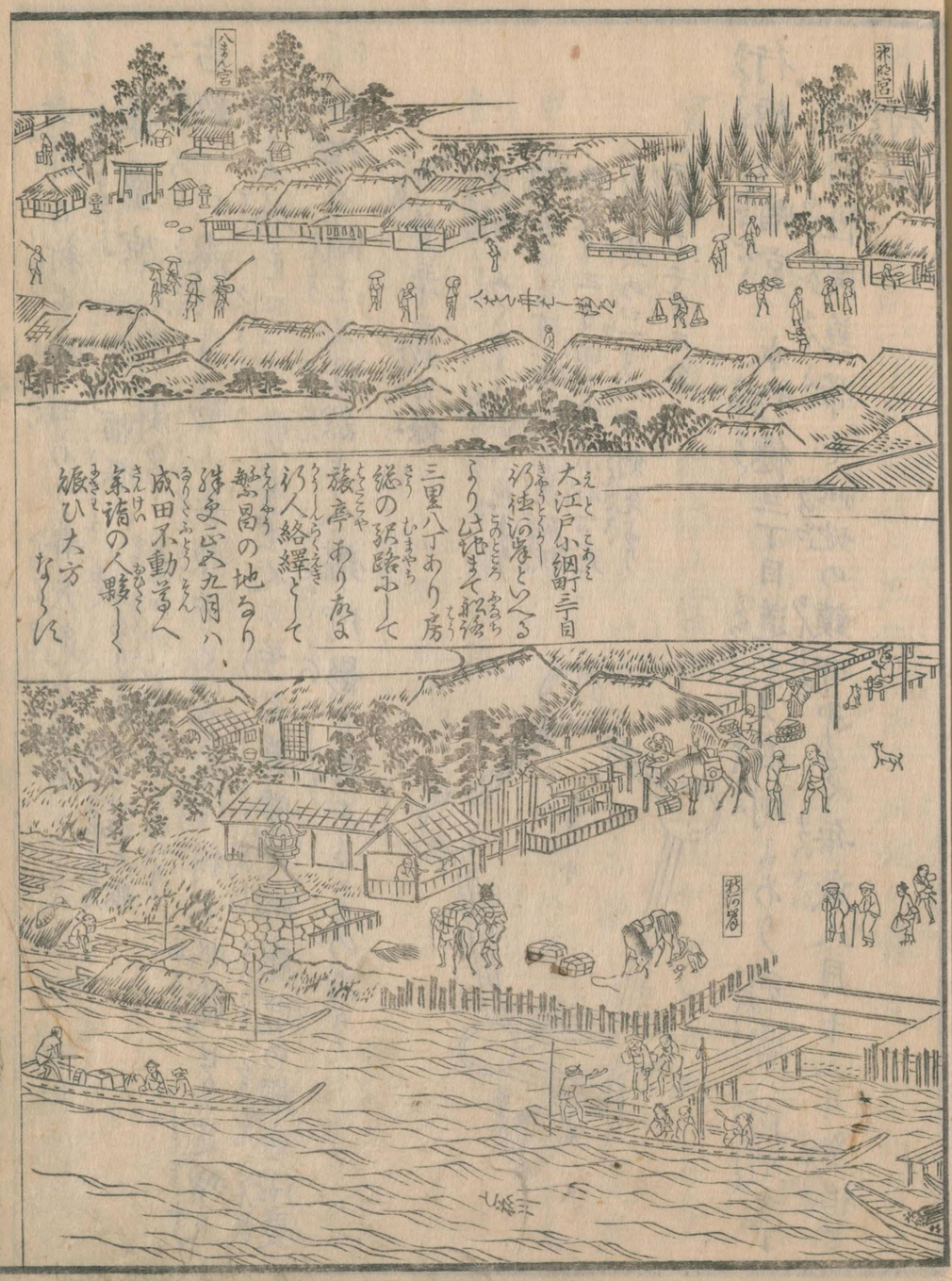
松戸津　常陸街道ゆくく驛舎あり更級日記ゟ鏡の瀬松里ゟ津ゟとありくくあるくゟ此地のことをいふあんく欤　戔経紀ゟ治承四年九月十一日武蔵と下総の境ある松戸の庄市河といふのあたりよりあんく欤（按ずるに下総國垣生郡を土民中略しくく波不と唱ふたる是なり）

松戸堤　同所新利根川の堤をいふ鴻臺戦紀ゟ天文六年十月北條氏綱小弓御所義明を攻る須臾の間に松戸の宿を夜深ゟ通り已まきれくく浅草川を打越ゆるの宿ゟ今ゟ未津土人青戸村あり土人青戸をあんと唱ふ又津と戸とハ通音なれハ或ハ青戸を式ゐんく今戸八幡宮の社記ゟ今戸伽藍ハ北條氏綱の建立なりと伝ふ此ゟ未津と唱ふるも同しく例なり

相模臺　松戸の驛ゟ東の方れ臺をいふ

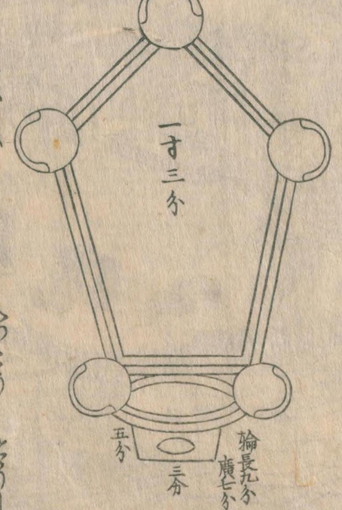
東西四百歩ゟあまれり鴻臺戦記天文六年十月國府臺合戦の時ゟ廣南北五百歩ゟ葛西ゟ青戸村




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

女神と称せ神田あり弁天免と唱ふ
船霊宮　画像一幅探信の筆入津の湊にあり此神を崇むるものなり
古鈴一口湊村青蝋山善照寺といふ寺より屬を開山八覚誉上人と号せ慈覚大師彫造の観音湛慶の作の焔王又法然上人鑑彫影と称するものあり




仆量五十二銭目餘
唐銅のやゝ甚古色あり惣長サ三寸二分剣の裏延板鈴大サ三寸回り内小石一ツ宛あり鈴の口一寸八分剣先より元まで二寸三分

行徳八幡宮　本行徳三丁目道より右側よあり別當ハ同所一丁目自性院兼帯せ此地の鎮守やゝ毎歳八月十五日祭祀を行ふ

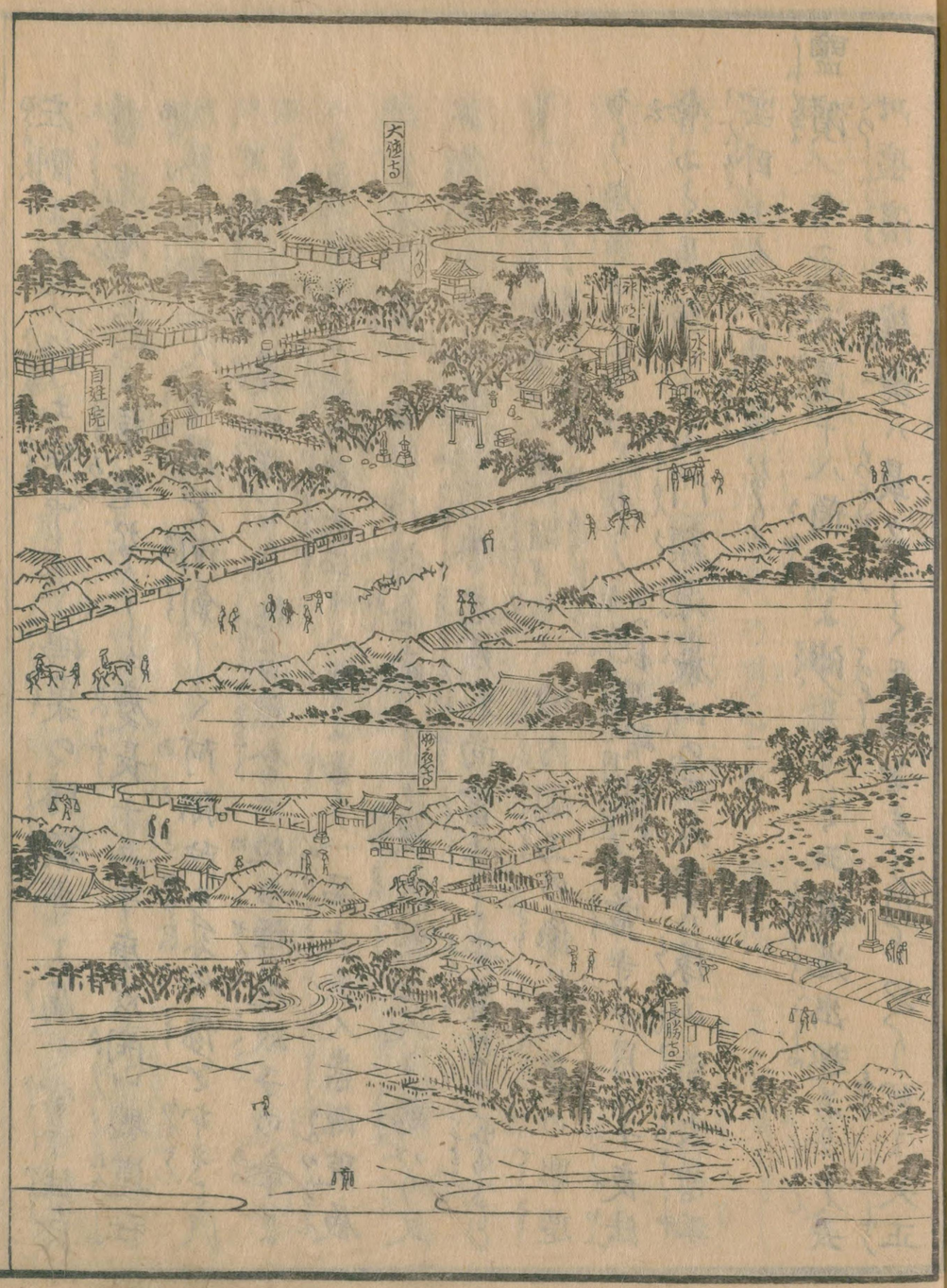
神明宮　同所一丁目街道の左側よあり此地の鎮守ともせ別當ハ真言宗やゝ自性院と号す毎歳九月十六日を以く祭祀めり辰とす其祭るゝ所も伊勢内宮の土砂を迂しく内外両皇大神宮を勧請しまつる相伝ふ當社昔ハ川向中洲と云地よありしを後此所へ迂せゝより又此地を金海の森と号く慶長十九年甲寅金海法印といふる沙門此地よ一宇の寺院を開創して金剛院と号け依く金海の森とぞ称せりとぞ（按よ葛西志といふる書よ行徳ハ金剛院の開山某行徳のほゝえるより一名とそる由記せり）

金剛院廢址　當寺より南の方よあり此所の金剛院ハ羽州羽黒山法則先よりくる処の金剛院の旧地なり（金剛院ハ今ハ廢せり）

漸寺よ屬をゝくり其昔行徳有験の山伏住りしにより竟よ此地名とゝのるより云伝ふ

海巌山徳願寺　本行徳の驛中一丁目の横小路船橋間道の

# 行徳 徳願寺

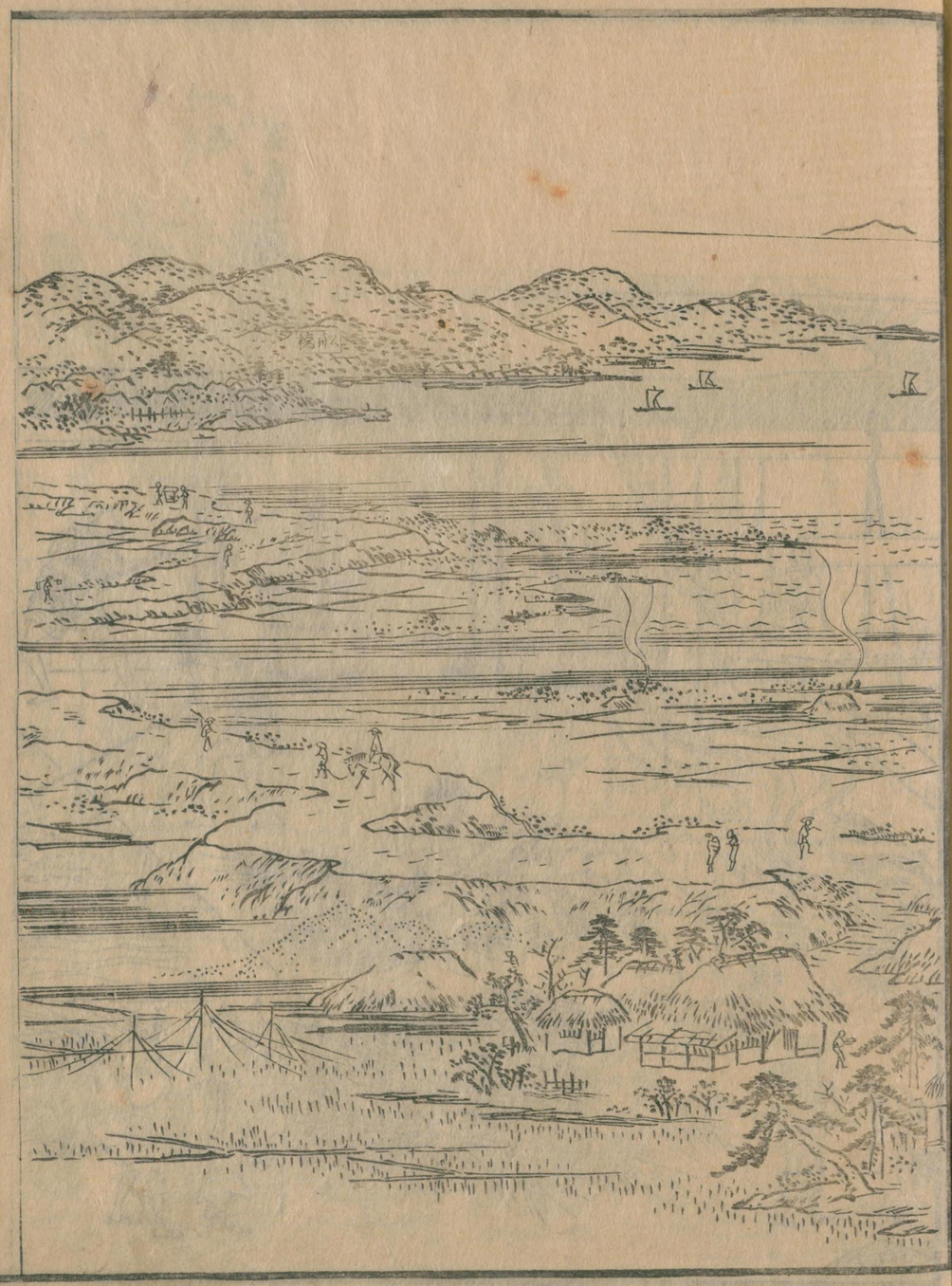


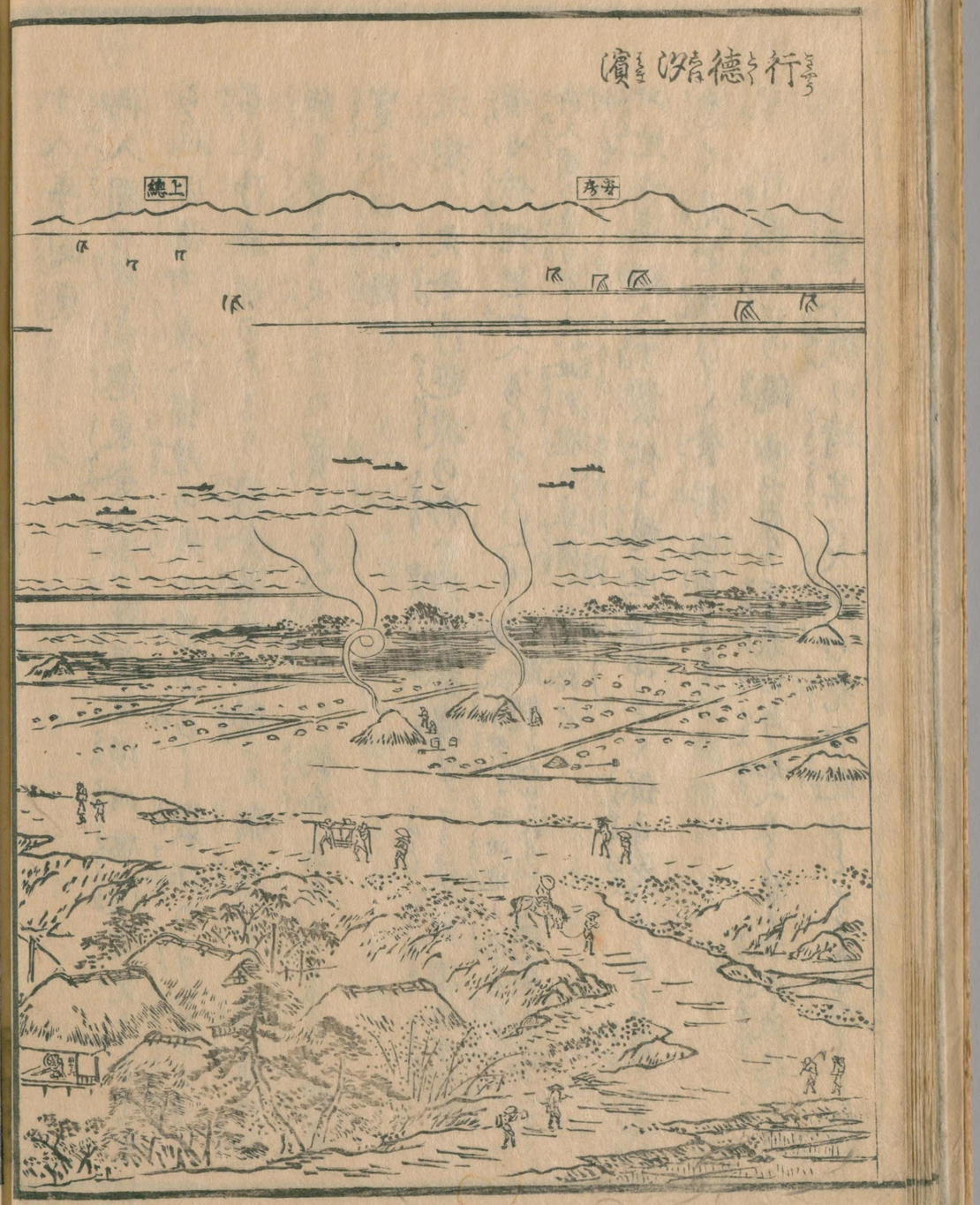

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

左側よあり浄土宗ゆゝく鴻巣の勝願寺よ屬を當寺往古ハ
普光庵とゝくる草庵なりゝゝ慶長十五年庚戌開山聰蓮社
圓誉不殘上人寺院を開創ゝく阿弥陀如来の像を安置ス
丈三尺寺なり佛工運慶の作なり往古鎌倉二位の禪尼政子の命よ
より是を造る遥の後天正十八年よあり一品大夫人崇源院殿
鎌倉より移ゝゝのひ御持念ありゝゝ後大超上人よ賜りり又
當寺弟二世正蓮社行誉忠残和尚當寺よ安置なりゝゝと
なり十七世晴誉上人殊よ道光普く境内閻王の像ハ運慶の彫造
四方よ溢れ信心の徒多しとゝ
あり座像ゆゝく八尺あり毎年四月七月の十六日當寺十月八十夜法
會ゆゝく最賑ゝゝ山門額海巖山の三大字ハ縁山前大僧正
雲卧上人の真蹟なり

鹽濱 同所海濱十八箇村よ渉りと云風光出趣あり土人去
此鹽濱の権輿ハ最久ゝゝ始をゝゝとゝりと然よ天正
十八年関東
御入國の後南總東金へ御遊猟の
られ船橋御殿へ鹽焼の賤の男を
召れ御感悦のあり御金若干を賜
猶を営ゝく天ゝ下の寶とゝくゝ旨
寛永の頃迄ハ
大樹 東金御遊猟の砌ハ御金杯賜
頃も修理を加へまゝるとゝく
御入國の後日あゝて此邊の鹽濱への船路を
開らゝゝ由ゝゝ今の小奈木川是なり
此地の鹽鍋ハ堅製他ハ越堅渕ゆゝく保る久ゝゝを東八州
悉く是を用ひゝく食料の用とも
甲宮 行徳入口の繩るゝあり堅来由今知へゝす土人或傳へゝく
云國府臺合戦の時某の大将の塊を紀ゝゝとゝをあゝん狄

事跡合考よ云此地よ塩を焼ハ凡一千有餘年よあれりと又同書よ天正十八年

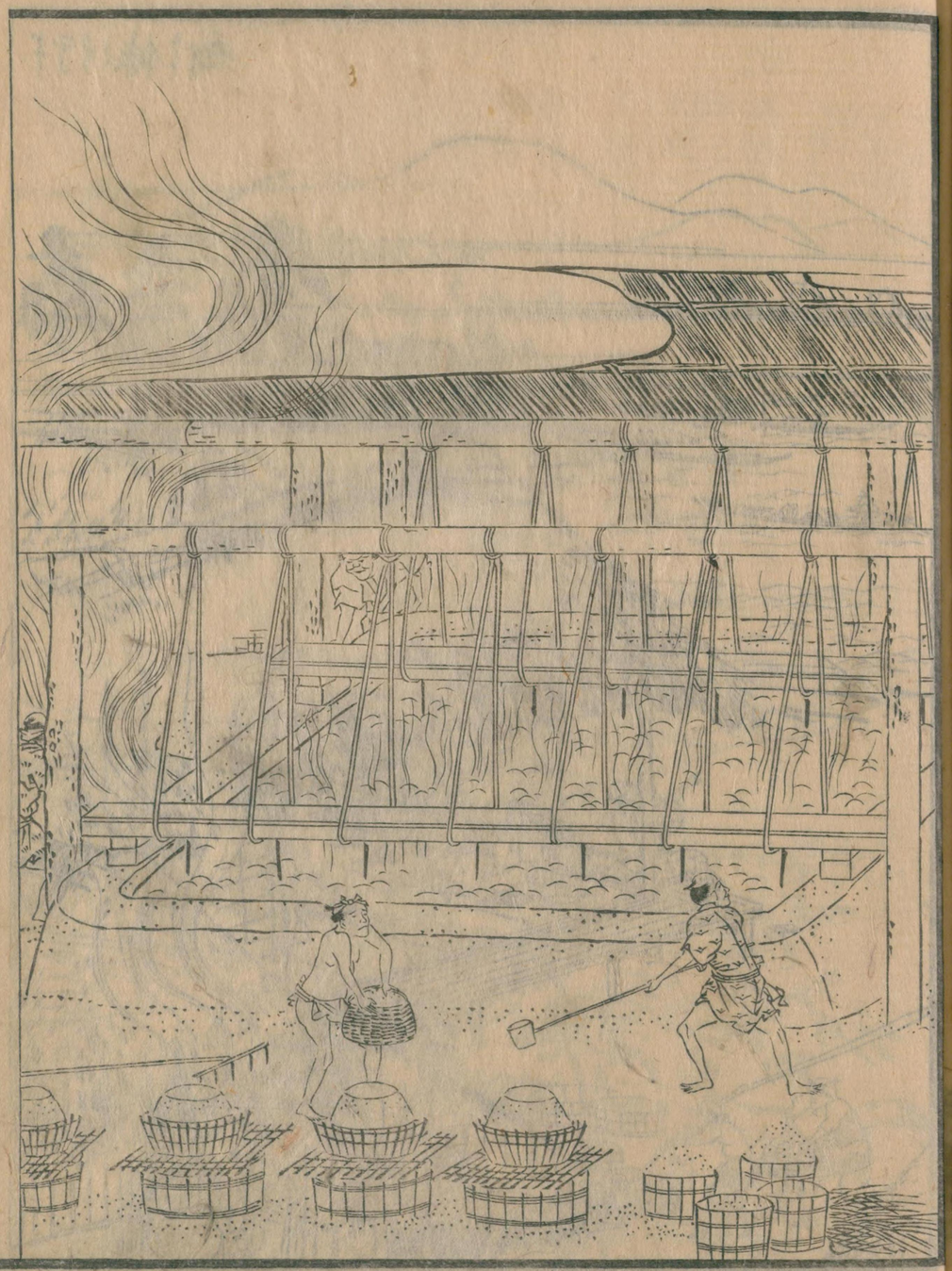





濱ゟ汐碕徳ゟ行ゟ

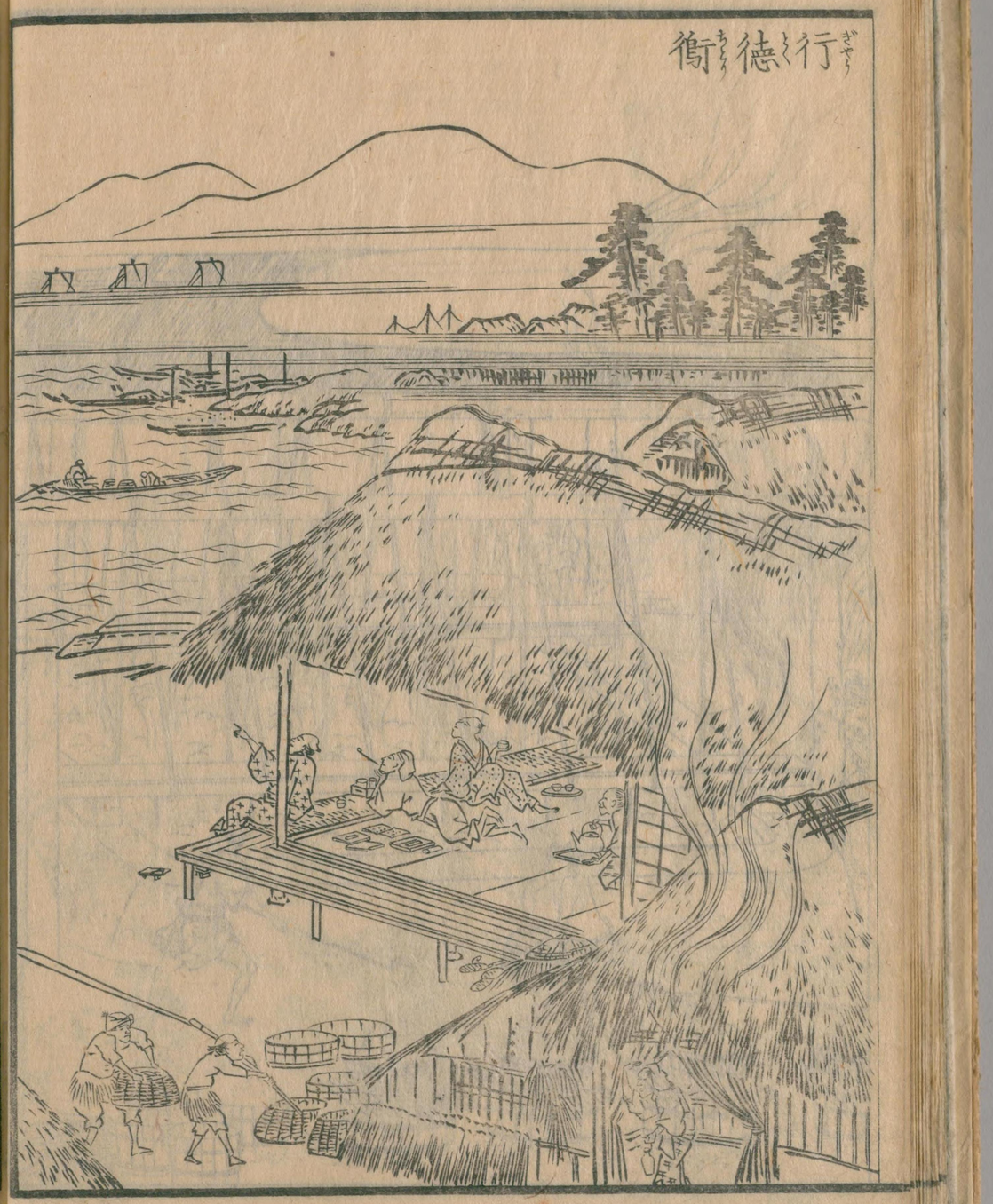
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 行徳塩竈之圖



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

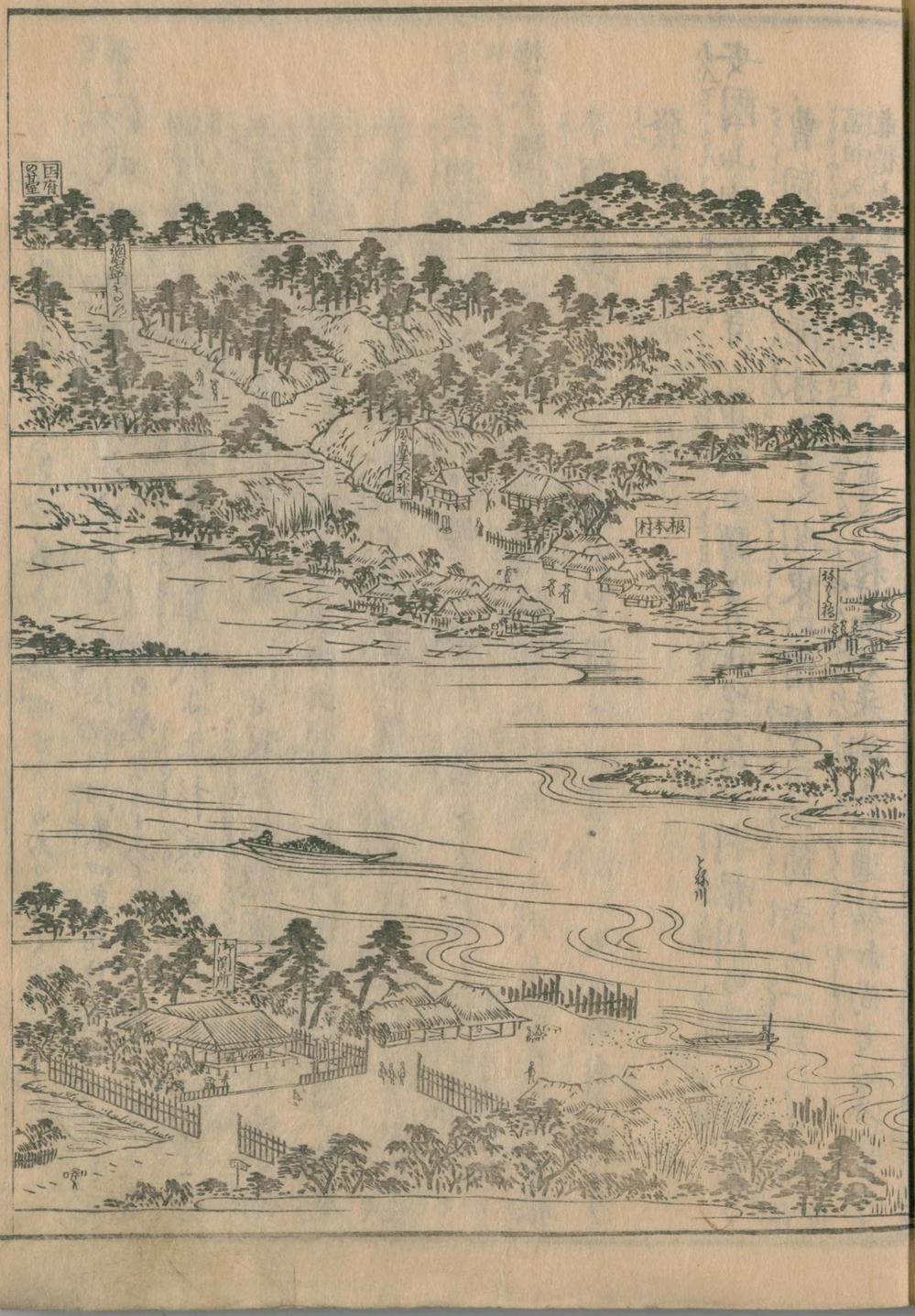


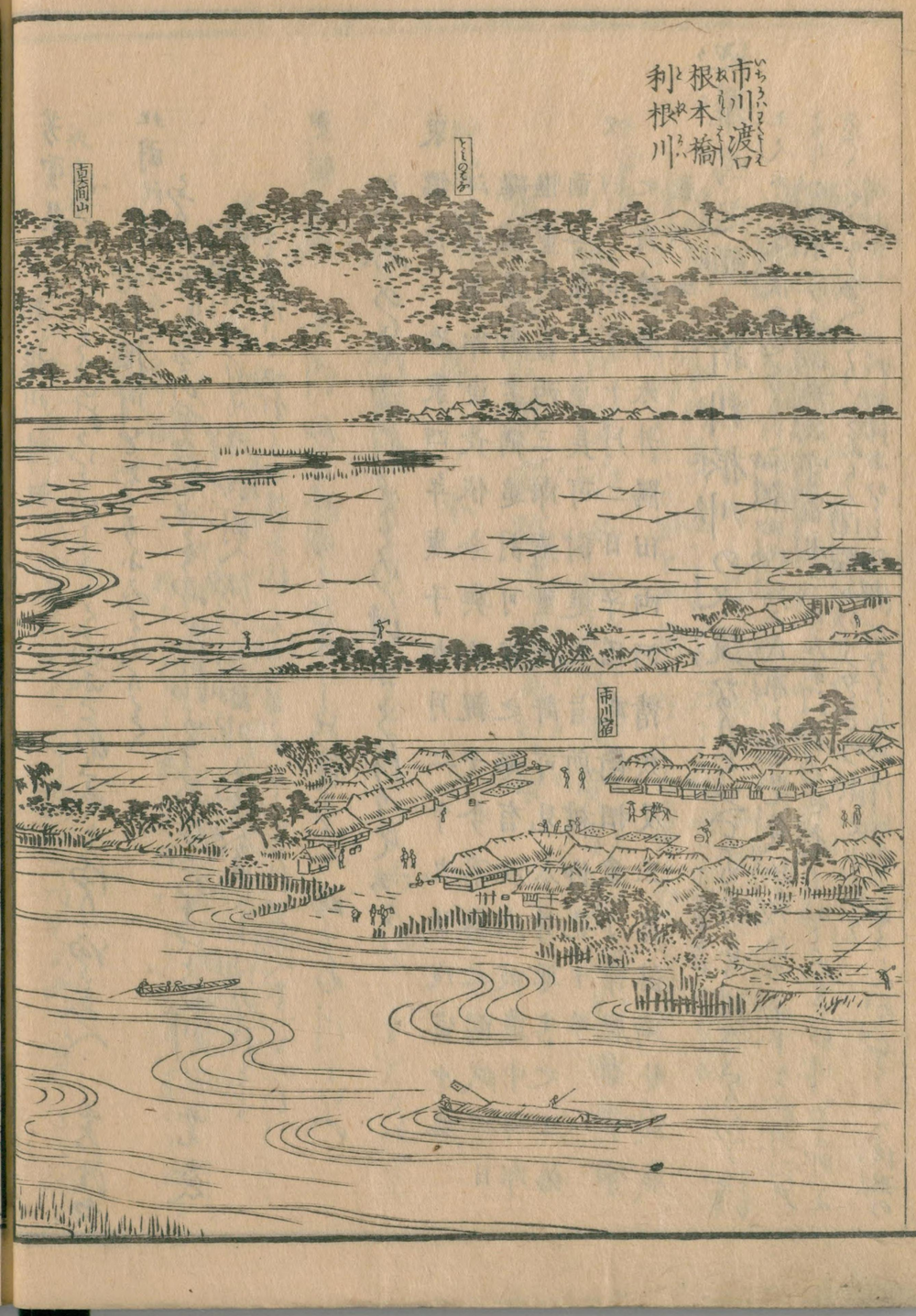
# 徳行ぎょうとく之衙うち

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

當社ハ行德八幡宮の別當兼帶す祀
因光大師鏡面影　行德の東の海濱高谷村淨土宗了極寺
ゟ安ゐ因光大師鏡を照しゝく自己の姿をうつし畫ことのゝ
御影なりとのゝり　土俗錦の浮影とも称せり
塔婆あり　寄特あり　増人得作す
長島湊　葛西長島と一隻の地あり　昔此地ゟ長島殿と称せし領主
梵音寺　觀音　相伝ふ太田道灌の項ハ國府臺の麓ゟ舩を
靈蹟の廢址あり
泊す其後野州奥州常州總州等の國ゝ高瀬舟の便利よき
を用ゆるとのゝりより行德へ運送するとハあれりとのゝ
永祿二年小田原北条家の分限帳ゟ太田新六郎所領の中ゟ葛西長島高
城と云　万葉集ゟ補ひ作り　活字板旧名を太井河とのゝ　東鑑等の書ゟ
新利根川　源平盛衰記ゟ利根ゟ作れり
又清浦奥義抄云下總國かつしかの郡の中ゟ大河あり此河の東をいへ葛東の
郡とのゝり　倭名抄ゟ
今武藏國ゟ属せ又北条五代記國府臺合戦の条下ゟ西ハ葛西と称しゝく
世俗坂東太郎と称し　或ハ文巻川又ゟ川とのゝり
行德を流る方ゟ行德川とも号く水源ハ上野國利根郡文殊
嶽の出谷ゟ発し高科川吾妻川烏川碓井川及ひ信州の
國郡ゟ出る和の諸流合し又上州渡瀬川も利根ゟ落合栗橋ゟ分流しゝく一流ハ北総ゟ
入關宿木崎等の地ゟ傍く東流し銚子ゟ海ゟ帰せり　是を新利根川と号く
利根川と号く　坂東太郎　一流ハ武蔵下總の間を南へ流れ國府
臺の下を行德の方へ曲流し海水ゟ帰せり　是を新利根川と称す
按ゟ侍中群要ゟ散位を刀祢と云ゝ公事根源云大節ゟ刀祢ゟ称す　西宮抄ゟ大節ゟ大夫を刀祢と称す
神ゟ毎歳正月初午日大頭とのゝり　百姓ゟ
内ゟ是を佐とむ谷六位ゟ
ありく悪く刀祢とのゝり




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

里俗あやまりつゝ唱へもするへくす

市河の城址　其地今もつゝく義経記云治承四年九月十一日武藏と下総の境なるまつこの庄市河といふ所に着ぬよて上杉憲忠より今度中務少輔と唱へしは此人なるへし

入道了心の子息實胤自胤二人を取立下總國市川の城ふ擁し籠康正二年正月南圖書築田出羽守其外大勢指遣し數度合戦しそ同十九日終ふ城を責落せり

武州足立郡を過半押領し市川の城をとる云〻（猶前の第六巻石濵城の条下ふ詳なり）

根本橋　市河の渡口より總寧寺へ行間の小川よ架せる此地を根本村といふより号とそ橋下を流るゝ水を發せる和の水流なり

安國山總寧寺　市河の驛より北の方の丘利根川の流よ傍てあり（所謂常陸冨田大中寺武藏越生竜穏寺當寺ハ是なり）本尊ハ釋迦如来開山ハ通幼和尚といふ當寺

曹洞派の禪林ゆゑ関東の僧録司三箇寺の一員たり

往古ハ近江國よあり天正三年乙亥北條氏政當國関宿并地ふ移せられと屢洪水の患あるよりて寛文中竟よ此地ふ引とあり惣門の内右ふ鹽竈六社明神の社あり奥陸の摸なり

大田道灌手植攅と称せるハ大門の通り列樹の中下馬の石碑ふ相對して右の傍よあり又客殿の脇ふ梅の老樹あり是ふ道灌親裁るゝところ

當寺より京師道庵の解毒丸を出せり

## 國府臺　總寧寺の辺より真間の辺迄の岡をいふく称せる

北条五代記ふ云古き文ゆハ國府臺小菅代鴻巣とも書とあり今所の若ふとゝハ高野臺と書とのところ

州栗橋の西ふありく此地を云よあり和名類聚抄ふ下総乃國府ハ葛飾郡ふありと記せり依考ふるふ國府の近き辺ふある和の丘山なれハ國府臺と号たりしなるへし

式人云下総國葛飾の府ハ往古東葛西の地を本府と記行東土産ふも下総國葛西の府のうちの半日そ葛西昔ハ下総ふ属せり永正六年の宗長の津の浄土門浄興寺ふ立寄て清浦奥義抄の文ふ拠よ前の新利根川の条下ふ挙り以東を葛東と呼ひ以西を葛飾郡ハ大郡なりとハ利根川と國府を中央ふ定やく

# 國府臺 總寧寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

其二
古戰場

葛西とハ唱ふるハ是れと今ハ利根川を隔りとゝ葛西の辺ことゝく武蔵國へ加へたまふるゆゑとハなりしかり

國府臺古戰場　總寧寺の境内ことゝく其舊跡なり文明十一年七月北總の一揆臼井の城ゟ揩篭りる頃太田持資兵を發して此地ゟ陣城を取立件の一揆を攻落しる程の究竟乃要害なりれハ天文六年ゟも或ハ七年ゟ小弓生實御所足利左兵衛佐義明兵を起し小田原を攻んとして此處へ來ることゝ聞えありれハ同年十月晋北条氏綱及び氏康小田原を進發して同五日鴻の臺の陣を責る戰ひ利あらく義明父子并舎弟基頼共ゟ討死を又永禄七年ゟハ大田新六郎兄弟の輩小田原ゟ將き同苗美濃守資正入道三樂斎及び里見安房守義弘等と北地ゟ也しれハ小田原より討手として遠山丹波守同隼人佐をむかへ故ゟ太田兄弟相圖相違して武州岩附へ落行々り然よ北条氏康父子小田原より馳向ひ同年正月七日八日大ゟ戰ふ依て

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

總寧寺
羅漢井

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

# 國府臺斷岸之圖

# 總寧寺晩眺

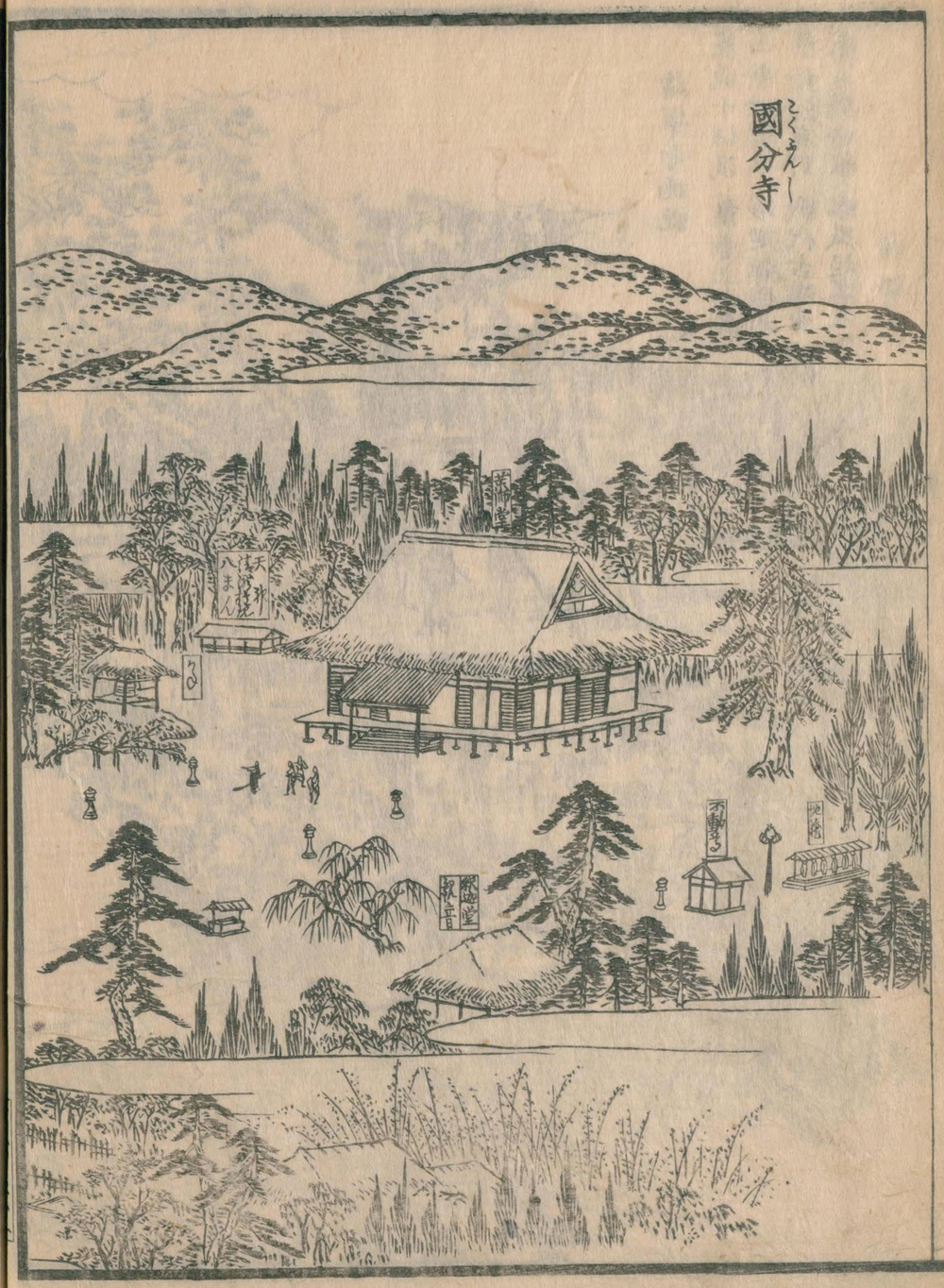
荒城千仞沒　蕭寺上方閒
山斷江帆出　踈廻郊樹來
磬鐘餘鹿野　戰伐古鴻臺
落日斯時恨　臨風起客哀

南郭

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

# 國分寺（こくぶんじ）



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

義弘三樂の葬終ゐ敗走を聞ゐ上諸書ゟ載る所の要を摘む

殿守墓旧址　同ㇾ境内ゐあり上ゐ富士淺間のゐ祠あり

白檀多ㇾ

石櫃二座　同所にあり寺僧傳云古墳二双の中北ゐあるものを里見越前守忠弘の息男同弥七長九郎弘次と云人の墓ありとの一ツハ其主詳ならず或云里見義弘の舎弟正木内膳の石櫃なりと中古土崩れ露れて今ハ石棺の形地上ゐあり其頃櫃中より甲冑太刀の類なり金銀の鈴陣太鼓其余土偶人等を得たりそ其一二を存して德寧寺ゐ收藏せり

按ゐ上世の人の墓なるべし里見長九郎及正木内膳の墓とせるハ何れも誤あるべし

鐘ゟ淵　同所斷岸の下利根川の水流を号く傳云里見氏乃陣鐘此淵ゐ沈没せ故ゐ号とすと其鐘今も此地の水底ゐ存せとて或人云鐘の水中ゐ落入ㇾ時ゟ此地ゐ住し慶長の頃迄居られしと云此鐘ハ船橋慈雲寺の鐘なりと此地へ持来るとき豊島刑部左衛門秀鏡ゟ陣國府五郎某ある人の

國府城址　同所徳寧寺より東の方をいふ往古國府五郎某ある人の居城なりしゟ慶長ゆより沒収せられしと云ふ

按ゐ國府五郎ハ千葉介常胤の弟國府五郎胤道なるべし同巻牛込前宮の条下ゆを

商の人此地ゐ住し慶長の頃迄居られしと云ふ

國府五郎のゟを挙置るとて

國分山金光明寺　同所東の方國分寺村ゟあり今ハ新義の真言宗ゆゝく京師三宝院ゐ屬せ本尊藥師如来の像ハ岡山行基大士の作脇士の十二神将ハ運慶の彫像なり

聖武天皇の御願ゆゝく毎國ゐ置ㇾ所の國分寺の一なり中興開山を宥天法印と号し本堂の額ゐ金光明寺の四字を書せーハ智積院僧正運敞の筆なり

樓門　樓上ゐ古佛釈迦安置せ開創時世のゟゝく詳有なり

釋迦堂　本堂の右ゐあり本尊ハ丈六像天王の像ハ上古の物ゆゝく其奇古なり左右帝釋梵天皇普賢各一部写せーむ云ゝく若経各一部写せーむ云ゝく釋迦牟尼佛の金像高一丈六尺者各一舗を造り并大般若経各一部写せーむ云ゝく小田原北條家制札一通　奥ゐ子ゐ月十四日遠山左衛門尉と有ゝく金吾領國分綱と宛名を記せーり

古證文一通　一通とも天正十三年乙酉二月三日とありゝく印を一通の宛名ハ國分寺衆徒中又一通ハ國分寺同宿中と宛名を記せーり

古笈一　權大僧都觀学院慶長六年と彫てあり

延喜式主税式曰　下總國公廨各四十万束國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束藥分料一万束下畧

## 鏡石

真間の弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の傍ら溝の中あり土人此石根地中ふかく其際を知らず依要石とも号くるとぞ

當寺往古は伽藍魏々たりしとも あるその星霜を経て大ひに衰廃し今は昔の万一を存するの當時の礎石と称するその堂前ふあり今の寺境は大田道潅の頃の陣屋の旧跡ゆゑ古の寺境は乾の方ふあるゆゑ今は畑となれり

内膳山　國分寺より東の方一丁計を隔てる丘をいふ往古里見義弘の舎弟正木内膳ら陣営の地ふゆゑとぞ

鏡石　弘法寺より國分寺へ行方の田畔石橋の際の水中ふあり此石根地中ふ入る其際を知らず土人此石橋は國府の墓ふあるべき故ふ一ふ要石とも号くとぞ按ふ國分寺古伽藍の石材なるべき故ふ一ふ要石とも号くとぞ

持國坂　國分寺より真間へ行方の坂をいふ古へ此地ふ國分寺の四天王の内持國天の堂舎ありし故ふ号くとぞ

真間山弘法寺　國分寺の南ふあり市河村ふ属す日蓮大士弘法の地ふして六門家と称する所の其一員なり日頂上人を以て開祖とせ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

入重
玄門
倒修
凡事
の意を

こゝろ
人を
いつく
そそん
と

せ
行ふ

真間
弘法寺

我身ハ
もとより
まつの
雅楷
日蓮

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

本國院日頂と師いふ僧の中ゆて伊豫阿閣梨と称せる富木常忍の子なり文永四年丁卯日蓮上人ふ就く得度せ弘安五年壬午上足の第五となる日蓮上人の滅後守塔居を営繕して本國院と号ぜ土人ハ山本坊と称せ正安元年己亥父常忍寂せもの後哀ぶつゝく八月十二日ごを出去り終ふかへらず依示寂の年月其終焉の地をあらす也一ぬ寺院をいつゝ日を忘日とすとそ

造り當寺ふ奉安を日蓮上人日頂師を祖師堂そ點眼せも賀の書を賜ふ

像を置此像ハ日法上人の作なり支院十餘宇各磴道ゟ下に列を大門ハ松の列樹ゆゝく六丁程あり

楓樹 釈迦堂の前ふあり今ハ枯株となりぬ其形を存するのみ一ハゆゝり四五丈ふ

あるべし 所謂真間の楓と称せるの是なり

遍覧亭 古文の横のゆふあり額ふ遍覧亭と題せ黄檗千呆和尚の筆跡なり此所ハ山崖ふ臨ゆ遠く房総の海水遠く眺け江戸の大城甲相の群山雲ふそゝ霞ふ横ゆゝく又こゝゟさゆハ実ふ千里の風光を賞へべし

樓門 石階の上ふ聳ゆ左右の金剛力士ハ仏工運慶の作なりと云ふ全躰黒色ゟ

その他ゟ異なり撥上ふ掲る額ふ真間山と題せ弘法大師の親筆ありとぞ

當寺往古ハ真言瑜伽の古刹なりしゟ日蓮大士此地ふ遊化の頃

寺僧大ふ宗意を論ゝ竟ふ大士の化導ゟ帰依ゝ宗風を改

轉せるとぞ 或人云西新井邑総持寺ふ安せる弘法大師の霊像ハ

當寺改宗の頃かゝふ迁ゝまゐらせゝと云日ゟ統抄日了性

真間の弘法寺に住せり或日日常衆徒を化
す寺因て本化の道場となせ云々又先徳記を考ふるに関東河田谷天台宗の
中ふりたる性と云あり本文は宗祖上人と同巻せし住侶の名を往さるをそ
くも此ふりたる性なるへし
當寺什宝多きうち中にも宗祖上人及ひ諸徒の真筆の
曼荼羅消息の類ひ数通ありて悉く挙て不遑毎歳九月
九日より十八日迄法華経千部讀誦十月十三日は宗祖上人の
忌日たるより御景供を修行せり近在の道俗群参を
真間浦　同弘法寺の前の水田の地をいふ勝鹿の浦ともいふ
此所のをも云ふ
所謂大洲は初て洲ふありし所なり土人云昔は真間の崖下まで浪打寄たりと
地とかや今も其旧跡とて字ふ残る
夫木抄
かつしかや真間の浦の沖は波ふあけのそほみかろ舟　俊頼
万葉集
可豆思加之麻萬能宇良未乎許具布禰能布奈
妣等佐和久奈美多都良思母
真間濱　地名
夫木抄
汀なる苔のむすまてうちもよせぬ誰ふ為にか玉を拾はん　為家
真間入江　是も同し辺なるへし
藪ふ沿革して古は違へとも今は耕田となり又は民家林
續後撰集
かつしかの海間の浦風吹ぬれは袖にもつけふ波の玉　道隆
万葉集
勝牡鹿乃眞々乃入江爾打靡玉藻苅兼手兒名
志所念
山邊宿禰赤人作
續千載
かつしかや昔の跡を尋ぬれは真間の入江に波ぞ立ける　為教
夫木抄
これかまの入江の秋の夕暮　為教
真間於須比
仙覚律師の萬葉集抄云於須比かとはをひあるより山のをひといふ
義なりと又寺中阿閣梨の万葉代匠記ふおもひ駿河能宇美
於思敞爾とあるふれはなり〳〵く儀辺ありとの本居宣長翁の考へを手古奈う儀辺ふ
ありしは浪さへそさきしとのふ意ありんとありく儀辺とのふ考ふられり
日
かりそめの入江の秋の夕暮　光俊

万葉集
可豆思賀能麻萬能手兒奈家安里之可婆麻未
乃於須比爾奈美毛登抒呂爾

真間継橋　弘法寺の大門石階の下南の方の小川ゟ架を所乃
ふるえの橋の中ある小橋をさしていふ（或人いふ古へハ両岸より抜をもて中絶おくおほけるゟ故ゟ継そしとも
いふありとさもあるべくやも

万葉集
安能於登世受由可牟古馬毛我可都思加乃麻
末乃都藝波志夜麻受可欲波牟

新勅撰
稀麻や昔のまゝ残れるを
風雅集
昔見し越路は波ゟ川しもや
同
かつしかまゝの継ゟ夕波越
（安ゟ朝村の和奇ふよとのつきそしとあるゟ水の澱ふうけうとゟ意ゟ山城の澄とハ異ゟり）

入重玄門倒修凡事の意を
ふくふくんとせしを以ふ修ふ乗ふるとのまゝ残ゟ

雅経
朝村
日蓮

真間手児名旧蹟　同所継橋より東の方百歩ゟふあり手児
名ゟ墓の跡なりとゟ後世祠を営ゟそこれを奉ゟ手児名明神
と号ゟ婦人安産を祷り小児疱瘡を患ゟる類ひ立願ゟて其
奇特を得とゟ祭日八九月九日ゟあり（云文亀元年辛酉九月九日此霊告ありとゟふ崇めなりとゟ春墓文集継橋記ゟ神
其説里諺ゟるのゟゟ証とゟふ足ゟず　弘法寺の中興第七世日興上人の
清輔奥儀抄云　是ハ昔下総國勝鹿真間の井ゟ水汲下女
なりあるゟき麻衣を着てそこゟ水を汲其容貌如ゟく
貴女ゟハ千倍せり望月のゟく花の咲ゟめくゟく立ゟを見ゟ人ゟ
相競ふゟ夏の虫の火ゟ入ゟ如く湊入の船のゟくなりこゟふ女思ひ
あまりゟくゟく一生いゟそくゟゟすゟを存しゟく其身を湊ゟ投（中略）
又かしゟ死はのてこゟともよそゟり真間乃入江真間北
継橋真間の浦真間井真間の野なとよあるゟれ此ゟり
云ゟ

萬葉集 過勝鹿眞間娘子墓時作歌 山部宿禰赤人

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻
問為家武勝牡鹿乃眞間之手兒名之奥槨乎此
間登波聞杼眞木葉哉茂有良武松之根也遠久
寸言耳毛名耳毛吾者不所忘

反歌

吾毛見都人爾毛將告勝牡鹿之間間能手兒名
之奥津城處

詠勝鹿眞間娘子歌

鶏鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絶
言來勝牡鹿乃眞間乃手兒奈我麻衣爾青衿着
直佐麻乎裳着者織服而髪谷母撥者不梳麻乎谷
不看雖行錦綾之中丹屬有齋兒毛妹爾將及哉

高橋連蟲麻呂

望月之滿有面輪二如花咲而立有者夏蟲乃入
火之如水門入爾舩已具如歸香具禮人乃言時
幾時毛不生物乎何為跡歟身乎田名知而浪音
乃驟湊之奥津城爾妹之臥勢流遠代爾有家類
事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

反歌

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒
名之所思

下總國相聞往来歌

可都思可能麻末能手兒奈乎麻許登可聞和禮
爾余須等布麻末乃氏胡奈乎

作者未詳

真間の井 同所北の山際鈴木院とのゝ草庵の傍ふあり手兒奈う汲ゝる井ありと云傳ゝ中古此井より靈亀出現せ〜故に亀井

梨園

真間より八幡へ行道の間よあり二月ころ花盛は雪を欺よく似たり李太白の詩に梨花白雪香と賦したるも諾なり

ともいふとなり

此鈴木院と云は北条家の臣にて鈴木修理と云人の造立故に鈴木と号しぬ又此庵の傍より其祖先鈴木遠江守の石塔あり是も同修理と云人造立せしものなり按ずに寛文八年戊申相州鎌倉鶴ヶ岡修造の時の工匠を鈴木修理長常と云ふ然時は番匠の家なるべし歌の岡梁雖然これも又別の人歟考へべし

万葉集

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所思

かくまで葬地のうけそりさまつ

葛飾八幡宮　真間より一里あり東の方八幡村よりあり常陸并房総の海道なり鳥居は別當は天台宗にて八幡山法漸寺と号す本地堂道をへだてあり阿弥陀如来を安置す二王門は表の左右は金剛密迹ゐ像裏は多聞大黒の二天を置てり神前右の脇は銀杏の大樹あり神木とす樹のもとの中は常は小蛇栖りて毎年八月十五日祭礼の時其時数万の小蛇枝上に頭れ出つ衆人是を奇異とし音楽を奏せ其時数万の小蛇枝上に頭れ出つ衆人是を奇異とし其丈三尺七寸あり竜頭の古鐘一口　寛正年間造立せしと彫付てあり側に小鐘あり是は永二十一年午三月廿一日と彫付てあり按ずに鐘の銘よりすれば元亨元年より八凡九十有余年後の年号なり永の頃乱世を恐れて土中へ埋めし時其年号月日を記

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 八幡不知森

やわたふちのもり

八幡

やわた

八幡宮

はちまんぐう

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

奉冶鑄銅鐘
大日本國東州下總第一鎮守葛飾八幡是大菩薩
傳聞寛平宇多天皇勅願社壇建久以來右大將軍
崇敬殊勝天長地久前橫巨海後連遠村京虵性動
鳧鐘曉聲人戰眠覺金啓夜響永除煩惱能證菩提
元亨元年辛酉十二月十七日　願主右衛門尉丸子眞吉
別當法印智圓

○筒粥神事　毎歳正月十五日の朝此神事あり
其年の豊凶を考ふ昔時當社の社人
又同日津宮といふあり夕七時頃當社の社人
柱に白布を巻きそを建上の方ゆく其白布を
ある人身を狂ひ件の樞の上へ登り四方を
相州日向某所もありくそこそこそ推登とる
下は樂屋をまうけ祇輿歸社よりおくり
數太鼓を合せく舞ひ歸り同十四日より十八日迄の間生姜の市あり
祭と唱へマチハ祭の俗語なり故ま土俗生姜

當社八宇多天皇の勅願ゆく寛平年間石清水正八幡宮を勸
請せし宮居なり遥の後建久ふ至り鎌倉將軍頼朝卿再び朽
傾の社壇を修營あるより封域廣くく壯麗くりしう又星

霜を歷くく今ハ老樹鬱蒼くくく上久くる卒垣とゝのふる
按ふ當社ハ國分寺ふ同じく一國一宮の八幡宮ありく往古府中ふ置れ
し故なるべし

八幡不知森　同所街道の右よ傍く一ツの深林あり方二十歩よる
す往古八幡宮鎮座の地なりと云傳ふ即森の中ふ石の小祠あり里老
云人謬りく此中ふ入時ハ必神の祟あり
らしてあるそ見を禁む故ふ垣を繞

或云平親王將門平貞盛う矢よもうり此地ふ至りし頃秀鄕のゐ討れ
六人の近臣と称する輩其首級を墓ひ此地ふ葬ふ森の中よ
入て働を終よ土偶人と顯れうりしうら其後雷雨よ襲ひ破壞せしより此地を路若あれハ
必たゝりありとて大ふ驚怖して又或人いふ此森の四帶ハ行德の持分なりと此故ふ
地あるふ依ふ幡の八幡の地ふ
因ふ依よ幡ハむかし庄の号あり中古什寶の内應永二十七年千葉介兼胤の
證文ふ下総國八幡庄本妙寺法華寺弘
郷田畠在家云くの如く記せり證ともとゝのふべし
法華寺三ヶ所寺勢職云く同生曽谷
曽谷妙見尊　曽谷村長谷山安國寺ふ安置せり當國千葉寺妙
見尊と同木ゆく其未木を以く彫刻をいよ當寺境内に王
義之宮あり華表の額よ晉王公廟とあり烏石葛辰の筆ふく

傍ヨ石碑を建つ何の彫れなるを知らず

高石明神社　八幡より東の方佐倉街道鬼越村深町の入口道より左の岡にあり別當八日蓮宗泰福寺と号し祭礼ハ九月九日なり土人傳云當社ハ里見安房守義弘の弟南總大多木城主正木内膳亮時綱の墳墓ありといへり

神體ハ剣を帯せし馬上軍神の像なりとぞ永享二年平亂負ふ中山の中與日祐上人へ注進の状ふ八幡庄内ふく高石神村の地を寄附ありし又同年二月同亂負日祐上人へ附ふる證文ふも下総國八幡庄高石神南方中島内坪甘のふとあり依て考ふれハ高石神村の名古きふの也

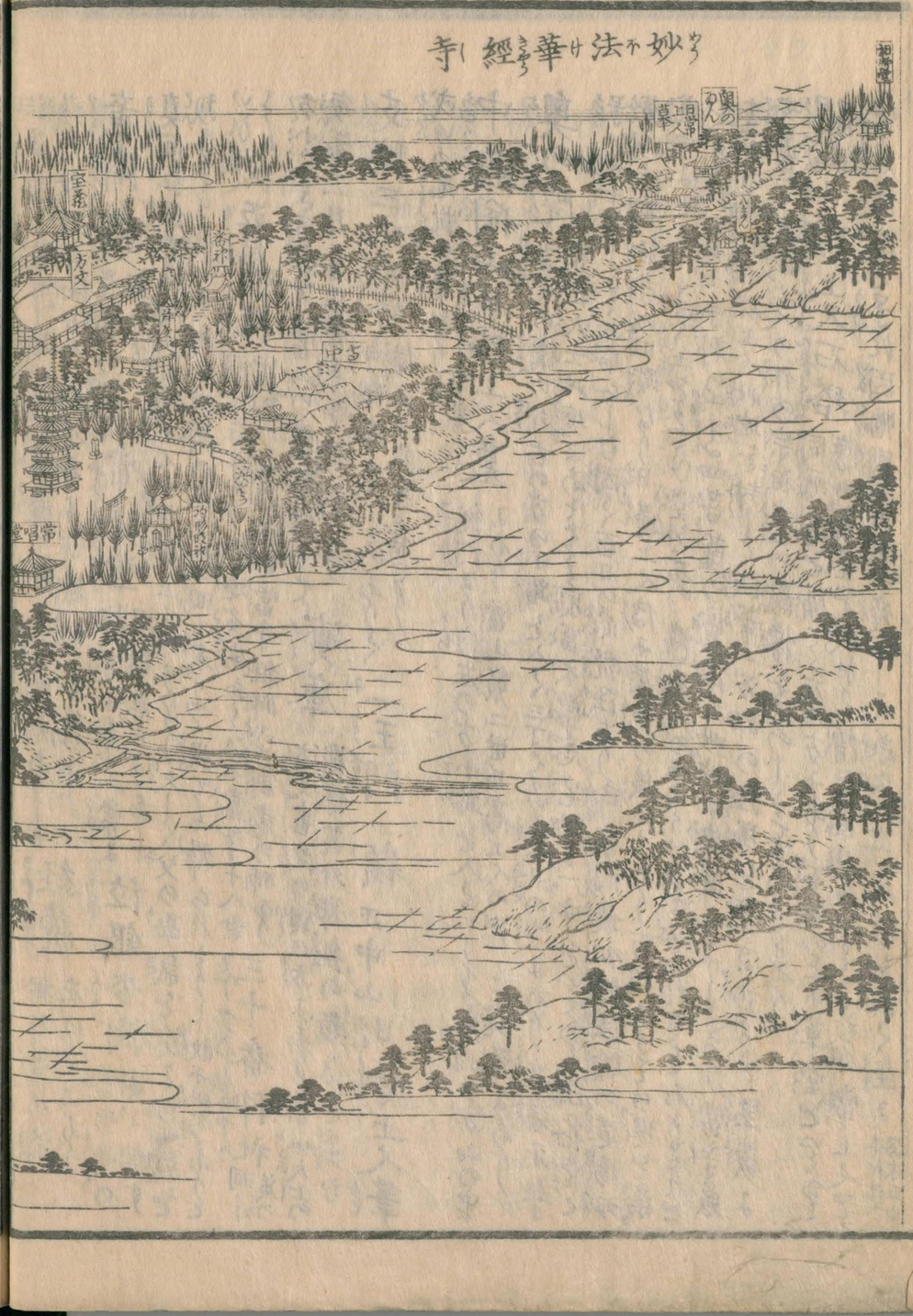
安房須明神社　同所中山の北池田とふより北の岡にあり傳云里見越前守忠弘の息男里見長九郎弘次の墓なりとぞ

今洲島明神　今狐塚の北条五代記ふ里見長九郎弘次生年十五歳初陣なりし時桃花馬ふ乗母衣を着し弓を持ちたる一騎ふるふ落ふりを相模國の住人松田左京亮康吉追ふけ組ふ落ふり取ふ首を取むとせしふと容貌美麗やさしき花のやふき少年なりしかバ首をうつにしのびず敵対ふ落ふりと思ひしふと味方雲霞の如く走来ふり首ふ落ふりしとぞ前後ふ迷ふかりふるふき目ふあやまりて弓箭ふ携ふる故なりと発心して帰國ふ地よふを出家して浄世と改名して一筋ふ弘次の跡ふ

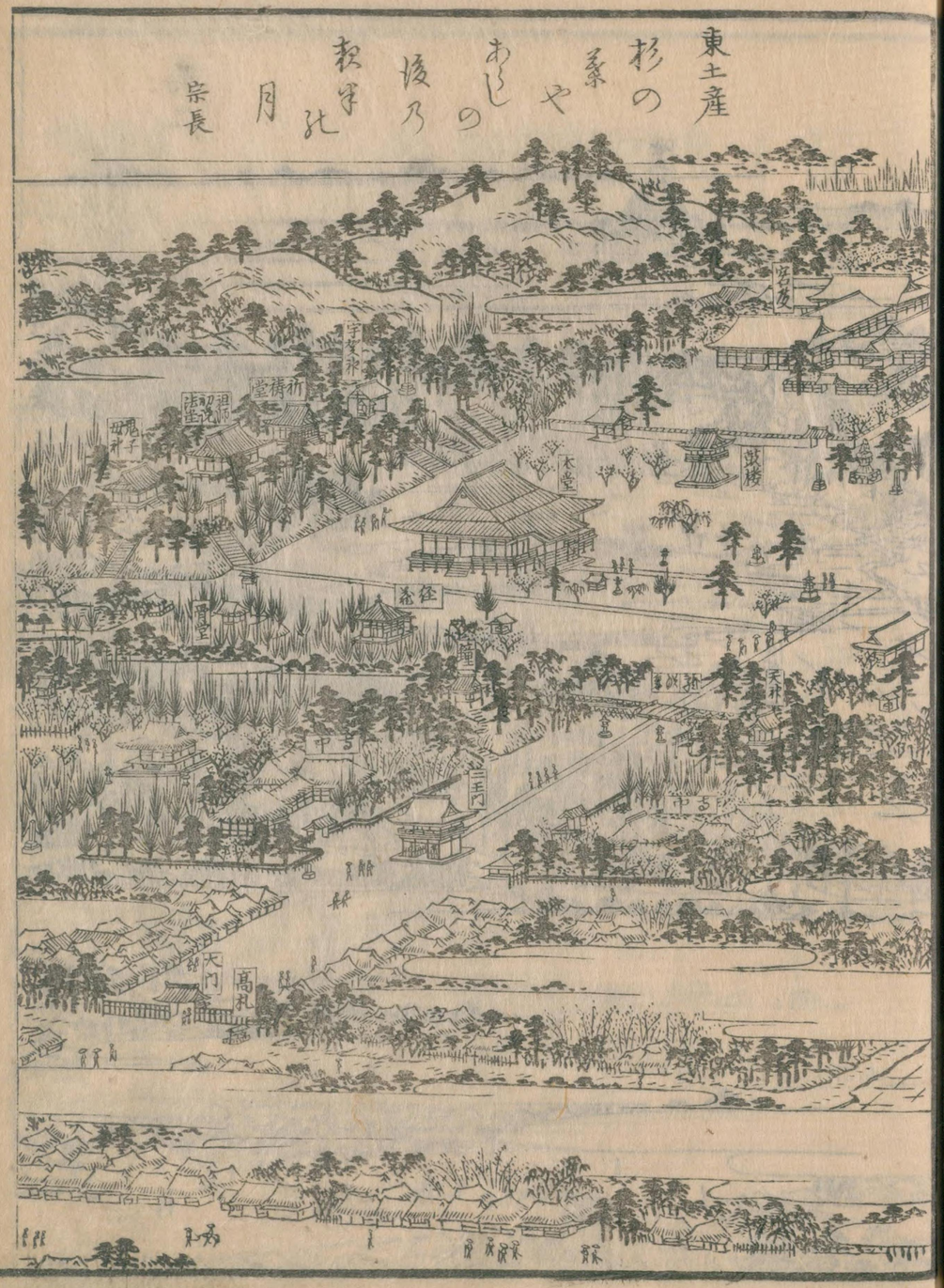
葛飾志云中昔かふしの浦ふ塩賣をのふありし時此ふを通りふる道猶ふ古き物語の葛飾ふ賀ふ生ふ者ふの男よはもりひふるふ塩賣をのふを見そめ何のふもふくふ一人の女ふ落ふりしふ其ふ先ふ忍ふとしふく

中興八日祐尊師ノ 鎌倉大草紙ニ云千葉介貞胤父ノ宗胤三井寺ニテ討死セシ後北國落迄ハ幼稚ニテ千葉ヨリ新田義貞ノ子ト號シ供ニ立テ上洛ス其後貞胤ハ宮方ニ參ル千葉ヨリ是ハ貞胤

妙法蓮華經 一寺

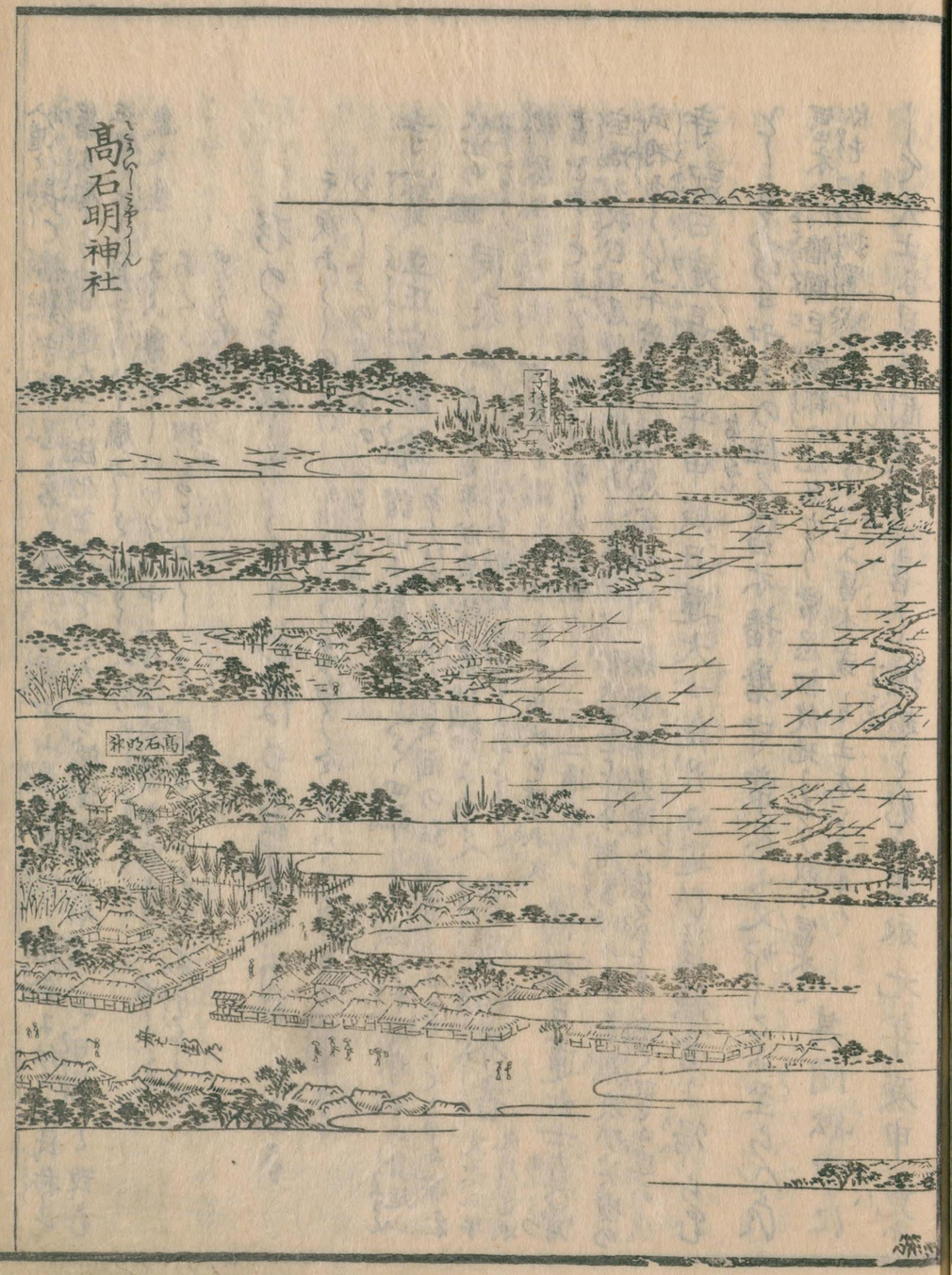



東土産
杉の
葉や
あしの
坂乃
教学
北月
宗長

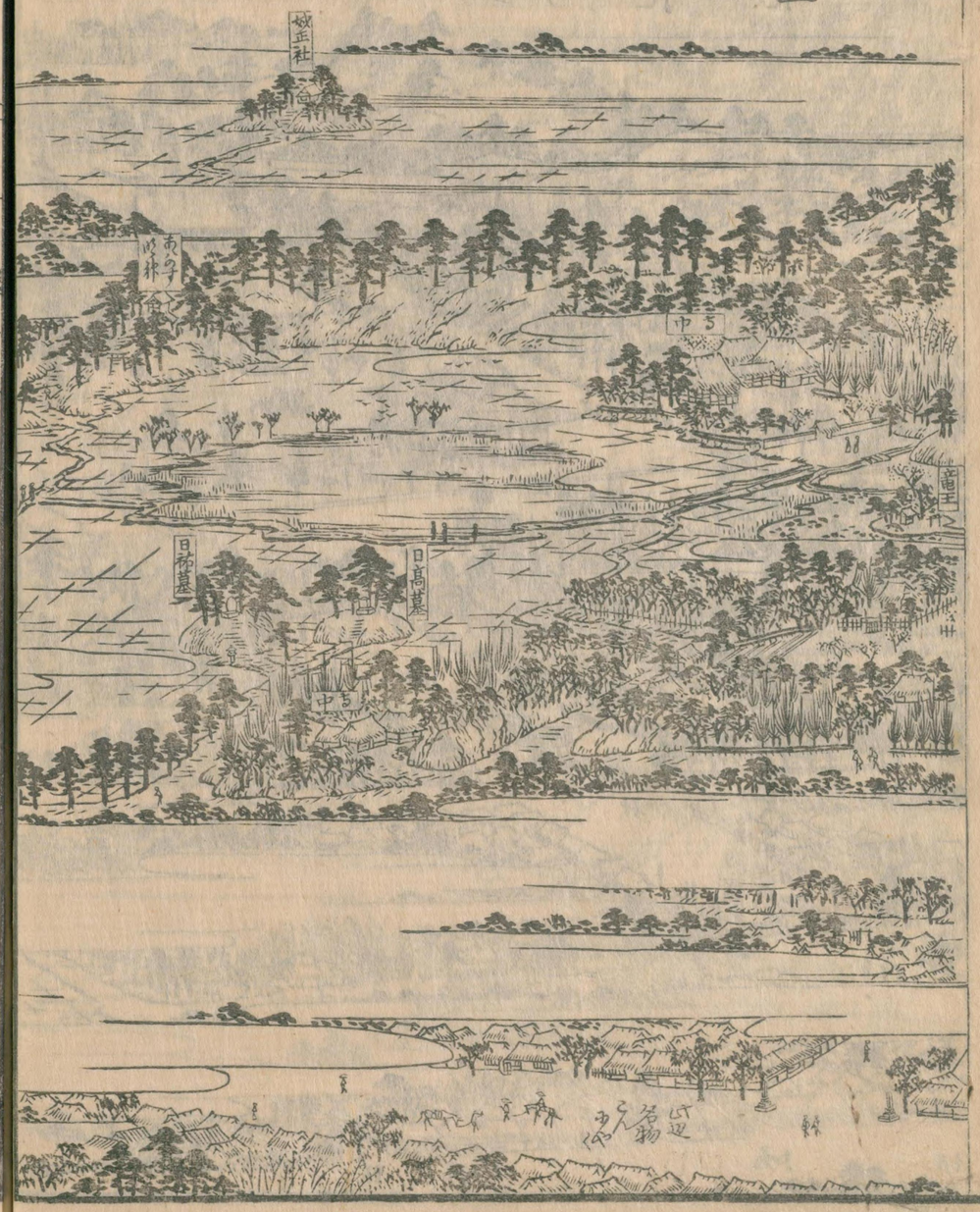



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

# 高石明神社




其二




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

道と長て播磨守常忍と名く淺下総國中山邑ゟ移住し鎌倉ゟ住ム土民称して冨木氏と爲ゟ日蓮大士の法化をたゝき大士の滅後竟ゟ難深して日常と改む

正安元年三月二十日八十歳ゟ〳〵化すとの傳へし一宇の堂宇中山の法花堂本妙寺ゟ一舎〳〵東土産 まゝの後そ〳〵のつゝり中山のあゝ〳〵ゟ一折るとあり〳〵

杉のまゝや〳〵あ〳〵ゟ

千夜あ〳〵のゆふ雲のそけ〳〵もり〳〵そゝ

めつ〳〵うの松風のことゝ〳〵

## 寺寶 立正安國論

あゝひふ當山ゟ藏る所ゟ四部なり洛の本國寺甲の身延山と真間の弘法寺とふ巻〳〵とゝふ宗祖大士の親筆なり 同来由 文永五年戊辰法鑒日頂のよあゝ〳〵常忍台徒了性と法義を論じ了性竟ゟ屈伏し冨木氏と稱せ和名抄罵城ゟ作り今〳〵ゟ冨木或ゟ土木とゝす 禀撰出衆書 文永三年九月冨木書書を奉〳〵是を告同十月朝日の返書ゟ〳〵二十二通あり 高祖日蓮大士真骨宝塔ゟ収む日忍師の添状あり其餘宗祖大士の諸宗師の曼荼羅及び其頃の類霊佛灵神の像ゟ多く記ゟふ追而武捨ゟひふ千葉家の消息寄附状の類

寺記曰建長六年甲寅日蓮大士総州ゟ遊ひ後鎌倉ゟ帰らむとゝゟの日中山の住人冨木播磨守常忍も又かゝこゟ至らんとゝ冨木ハ因幡國巨濃郡の地名なり常忍初彼地ゟあり故ゟ冨木と称せ和名抄罵城ゟ作り今〳〵ゟ冨木或ゟ土木とゝす 其間舩中にて大士ゟ見え聞法随喜〳〵檀越とゝる文永元年庚申竟ゟ宅地を轉〳〵一宇を営ミ大士をしてこゝふ居らしゟ此時一百日の間大ふ説法あり又大士自親一尊四菩薩の像を彫刻ありてかゝふ安置〳〵法華堂と號けらる 中山記ゟ云く宝庫ゟ一ゟる四大士の木像二刻十軀あり其一ハ佛形其一ゟ菩薩形ゟり皆大士の手刻と云〳〵此法華堂ゟ大士最初導法輪の道場ゟり今奥の院と称す 時ゟ曽谷教信 教信姓ゟ平氏次郎左衛門つと称す法名ハ法蓮日禮と唱ふ當國曽谷ゟ住ゟ後宅地をあゝらゝく梵刹とし曽谷山法蓮寺と号く 秋本太郎兵衛 茂氏ゟり當國白井の人なり子孫ゟ至り其地ゟ一宇を及び太田乗明等来〳〵檀越ゟて創建〳〵て白井山秋本寺と号く なる 乗明ハ五郎左衛門尉と称せ當國中山民部以補處連の子なり曽冨木氏の諭導をこゝく大士の宗化ゟ帰〳〵一子を投〳〵出家せ〳〵ゟ日高上人是ゟ漫中老僧日高尊師父乗明卒ゟるの後日蓮大士の命ゟ應〳〵日常上人の教を受其家を改〳〵精舎とゝ〳〵正中山本妙寺と號けて一寺とゝ〳〵正中山本妙法華経寺今の正中山の地是ゟり則日常上人を開山と称〳〵日高師を第二世とゝす然ゟ佛と号すと

心院日珖師 當山 十二世

京摂ゟり輪番〳〵て當山の貫主とゝゟれ毎年三月十三日ゟり同 台命ゟよ〳〵寺法を更めしゟり已降

十九日より至るの間法華経千部讀誦七月十五日相撲興行を十月
十三日八日蓮大士の忌辰なるより大法會を設く近國の道俗群參
しく大よ賑う

若宮八幡宮　奥の院の地より一丁ほり東の方叢林の中にあり富木
氏の鎮守の神なりとぞ　中山什物の内正和三年甲寅四月二十一日日高師
地等之事　中略若宮御堂中山坊若宮別當職被補簡の文よ云く所く堂宮田
物よ正安三年日高師弟彼岸田谷中　下略云々又同什
然れハ其頃ハ別當職を別ふ附し置く崇敬尤厚かりしとぞ

妙正池　中山より北の方二十町ほどを隔て千束村とぞ
ある云ふ千束の池とも號く傳云文應元年庚申日蓮大士　年三
十九　富木常忍を假る
所の法華堂よ入ること一百日の間妙法論を撰し群生を教導
ありし項此所の池靈婦女と化し日く彼地よ至りて大士の説法を
聽受し信心衆よ越えし一時彼婦女来を大士よ向て云く妾今
尊者の法施を冠り一乗の真因を得たるも願くハ大士手書の
本尊及ひ自の法号を賜ハらんことを乞大士乃曼荼羅を書し
又妙正とぞ法号を授ること婦女喜んて去人怪むて跡よ隨ひ至
るふ此池辺ほりく其婦女の姿を見失ふ然よ其本ある忽然とほく
傍の櫻樹の杖ふかくりてあり衆人奇ともほふ於て此池の靈なる
ことを知て妙正と号け後一社よ奉ることぞり

妙正大明神祠　同所ほあり或ハ神とも稱せり　俺癒を患ふる者祈
大士よ見えく本尊をたり龍女を祀所るり　念して驗ありと云　日蓮
葛飾明神社　中山より東の方栗原本郷の街道より左へ四町
ほりを入く叢林の中ほあり葛飾の惣社と稱れとも祭神詳な
らも同所真言宗萬善寺別當より祭禮八九月十五日ありと社より

東の方ハ林間稲荷の小祠の傍よ葛の井と稱る井あり當社ハ
洗手とぞ土人相伝へく此井の水脈龍宮界ほ通ふと云處

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　　ガラス使用

葛飾明神社

葛の井

萬善寺

栗原寶成寺

當寺の庭前ハ
海の大横あり
すべて枝ろ
あろれ四方へ
四面ろりまり
て壮観あり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用

疾を患ふる者此井の水を飲く驗あり此所も栗原本郷村
勝間田の池　同所船掛街道の道傍よりあり
の内なる故小上民本郷の溜池と唱へ池より東ハ寺内村と云池より
西小高と云ふ熊野三所権現の宮居あり萬善寺より兼帯
祭禮八九月十五日なり

万葉
勝間田之池者我知連無然言君之鬚無如之　新田部新王
右或有人聞之曰新田部新王出遊干堵裡御見勝
間田之池感嘆御心之中還自彼池不忍憐愛於時
語婦人曰今日遊行見勝間田池水影濤々蓮花灼
々可憐斷腸不可得言爾乃婦人作此戯歌專輒吟
詠也
勝地吐懐編曰右和歌の注曰今日遊行勝間田池を出見ともあれハ萬葉集堵ハ都の字
ゆゑくしく又堵裡ハ平城京中を通ひくしく然ハ平城京中を添下那類字名所和歌集ハ下總國とも清浦杭美作とも
考ふ良玉集ハ初瀬へ參りくるふ勝間田の池をそ

打ちくもりせハ勝間田の苔の池とやいはれくるふ
とうたふも奈良よりハ便ありと云ゝ

千載　二条大皇大后宮肥後
後拾遺
ちはやぶる神代も聞かくも恐き勝間田の池
新撰遠
かつまたの池のみなかみ
奇玩
年をへてくみてぞ知らん勝間田の池のそこなる
夫木
かつまたの池も繰ふかき岸の柳氏名不住せく
日
春雨にかつまたの池の水まさりくるふ
家集
かつまたの池のこゝろをいかにせん杜のみ
日
下ハなるも恋あしき池つゝみ雲のこゝろ
夫木
勝間田の池のこゝろやそのかみの
日
雲れの雪とりこめかつまたの池の
家集
勝間田の池の深緑の底までくまなき秋の夜の月
日
そなたとやくもりもはてぬ勝間田の池のまもなき
新撰六帖
かつまたの池のみなそこなれ行のまもなきそ

範永　寂然　顕仲　為相　慈鎮　家綱　西行　和宋

勝間田池
栗原本郷邑の
地にあり故よ
本郷の溜池と
号く。

万葉集
かつまたの
池を
われ
しるす
よしも

新田部親王
あきら
ず
あきらか
こと

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

洗川　栗原と船橋との間街道を横きりて流る小川を号く
血洗川とも称せり　千葉満胤意富日神社へ神領寄附の状あり洗川と
夷大将軍の宣旨を蒙られし後ハ其威勢実に草木の靡くがごとくなりされと意富日神社の神官ら累代天子勅宣ありしとも是を應せざる故に頼朝卿幕下ありしを度々の催促ありしかとも是を應せざる故に頼朝卿憤り甚しく船橋六郷の地を葛西三郎清重に給ひ清重此地より
むとせしとも神人及ひ六郷の農民ら三神の神輿を前に舁居
西栗原に支へて防き戦ひ其乱さらふ止らざれハ終に神官
治部太補基義神輿の前に伏拝切に空しくなりぬるを時乃
戦ひ神輿穢れしを以此川にて洗ひ清めたりしかとも血洗川
とを呼なりしとなり　或人云海神村の入口浅間より少し東の方の山より
流ハ源を蛇ふ海と号ひ是小川を太カ洗川と
なりと按ふに此川のことを云るハ誤なり又頼義
義四年庚子十月豆州石橋の戦ひ敗れし後安房上總を経て下総の國府よ
阿須波明神祠　西海神村にあり禅宗大覚院奉祀を娑竭羅
龍王を祀ると云　故ふ此地を海神耕田と道路とを開て海汀に向く
華表を建る九月晦日を祭祀の辰とす此日芋を食ふを旧例とも
故ふ土人芋祭と呼るハせり　當社ふ小柴
人首途ふ此阿須波の神ふ小柴をまもりて
長途の安全を祈りまふると云伝ふ奇林良材ふ下総國阿取波宮とまふしる社ハ
神の誓言ひあるを云と云ふ
万葉集
爾波奈加能阿須波乃可美爾　悕丁若麻績部諸人
伊波々牟加倍理久麻豆爾
新千載
名寄
今さらふいもかへさめやもろ松あすハの宮ふ少菜さしつゝ
いつれとあふ人の郭をかへてもろ松あすハの宮ふ芽をつむ
石芋　當社の入口よあり里俗ふ云く往古弘法大師東國化度の時日くれよ及ひ
世ふを通ふせられとあるふよ入ふひく一宿を乞ふものふを家ふ一人の老嫗
ありてく是を許しまふるゆゑ大師邪見の輩を教導ふんが方便まふそその家の
傍の芋を加持して石とされしゆゑそ此所ふ其芋四時とふ不腐れすして年ふ
生ずとぞ

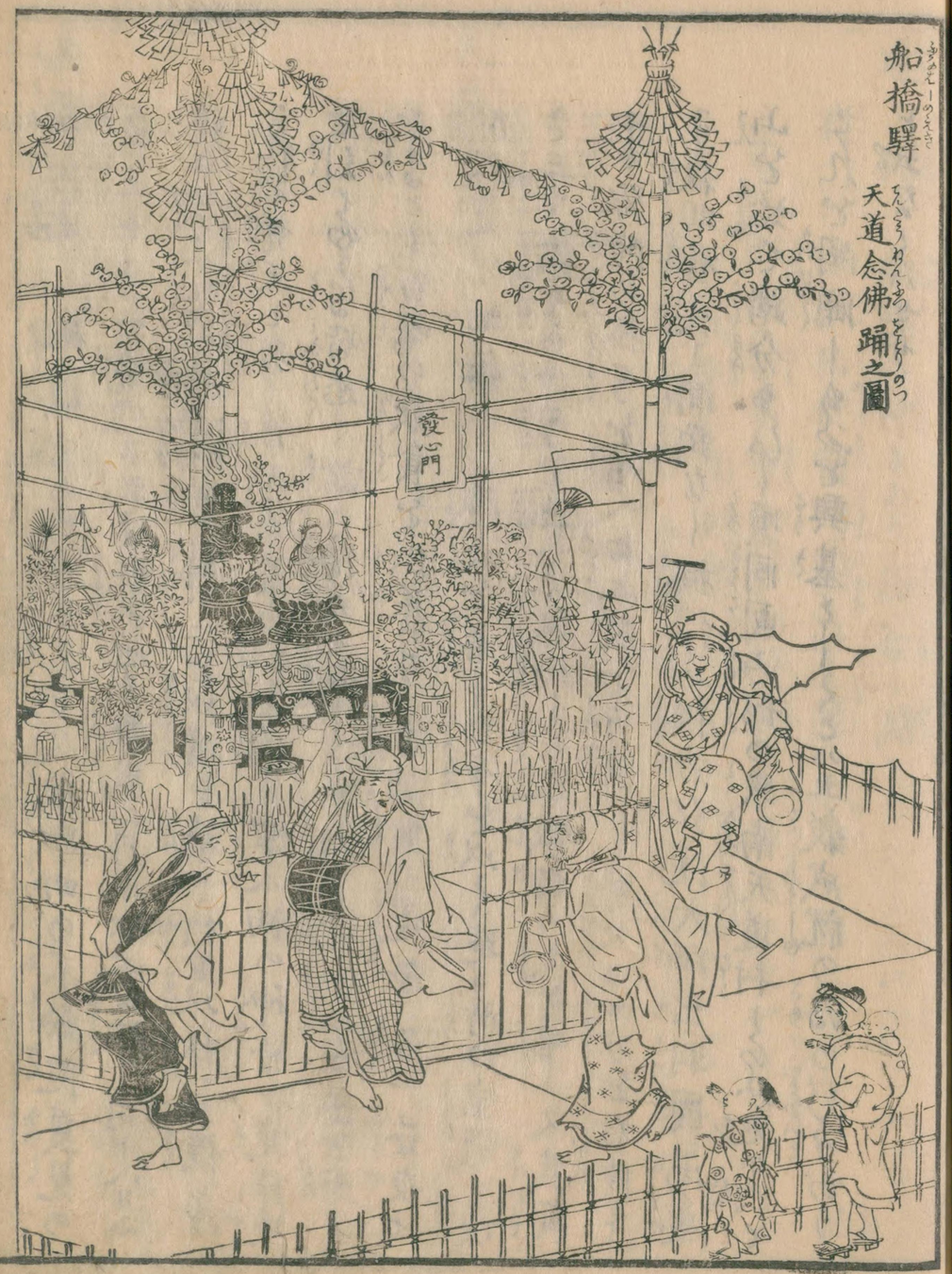
意冨日神社舊地

意冨日神社初鎮座地　舩橋驛舍の入口海神村御代川氏某の地にあり日本武尊此海上より八咫鏡を得給ひ伊勢太神宮の御正體と共に鎮座ありし旧跡なりとぞ今意冨日神社の地より此所迄八丁許あり御代川氏昔は澪川と作る澪は水の深き所をいふ訓義もて日本武尊を道案内せし神鏡を得せしめ給ひしとの後裔なり其子孫今猶連綿として夏見厨海神村の北の方にあり今東夏見西夏見と唱へ二ヶ村とぞ

神領古伊勢御神領おほく意冨日社の神主是を務たり

神鳳鈔曰　伊勢太神宮造替遷宮事曰食米廿々
注文　二所太神宮御領諸國神戸御厨御薗神田名田
等合
下總國
夏見御厨　上分布三十段口入三十段一名舩
橋二百丁
神鳳抄に其餘下総國おほく相馬遠山形葛西猿俣萱田神保等共に合せて五箇所とす意冨日神社傳より万葉集に
爾保杼里能可豆思加和口世平爾倍須登毛曽能

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用




船橋驛　天道念佛踊之圖

可奈之伎乎刀爾多氏米也女

かくよめるハ古葛飾の早稲をほめそやし神よ新嘗まつり後公へ献ずる此日ハ門をさゝず凡の人の入来るを忌ざるものゝ如く我うつくしとやつこの来んことをたのそふものそところをたとくいふ

船橋　驛舎なり　海神村及ひ九日市場村五日市場村等の三邑の惣名おほく古の神領の地なり舊名を湊郷と云ふとも往古日本武尊東征の時此地へ至りまひ海上おほく一面の神鏡をもとり其地を海外村と唱ふ依て其地よ神鏡を遷しまつる然よて須へ水無月ゆゑく旱ありて績官軍大に労る尊其時祷ありてハ験ありて二三日の間大雨降績官軍労ひをはくよて凱歌を奏し郷の辺洪水おほく神鏡の宮所へ移遷ふへき便なりしかハ船橋浮ゆく橋とかゝるものより此地名発るといふ　東鑑曰文治二年丙午三月十二日庚寅左典厩の賢息首服をかへ催促をかへるものつき由とある茶下よ下総國船橋市厨院市須と云ゝ

天道念佛　船橋宮の内の東光寺及漁師町の不動院夏見の
薬王寺等の境内ゟ於く執行せり毎歳二月十六日ゟ始り同十八日ゟ
終る　昔ハ一七日の間執行す　堂前ゟ土を以壇を築き竹を以柱を儀も
これを梵天と称し其四方ゟ四の門を開き四十八柄の神幣を建注連
を引まはし皆悉く諸の佛天ゟ表しこゝを内ゟ大日如来の像を安して
本尊とし百味の飲食を供養せり　詰衆の道俗ハ各一昼夜ゟ
間六度つゝ垢離して浄衣を着し白布を以造る所の宝冠を頂
き三宝諸尊の佛号を称へく敬礼し六根懺悔の文を唱へ又其間
中々弥陀の称号を唱へ鈦太鼓を打鳴しく梵天の四方を右繞
す数回昼夜ゟ間断なし　相伝ふ往古弘法大師出羽國湯殿
山を始て踏分給ひし頃同國山形の東南天道村とゝゟ地ゟ於て
これを開闢しゝゟ興基とゝくこゝハ五穀成就の名ゟあり
と云なゝハせり

遠う澪　船橋の沖ゟあり俗釜ゝ淵と号く土人の諺ゟ云昔平
将門の愛妾桔梗前将門七ひく後ハ流石ゟ都へ帰らも物
うくて船橋の里ゟ暫しゟもとゞまり終ゟ此海底ゟ身を沉しゝと
なり

大峯山慈雲寺　同所二丁ゟあり
ゆゝしく鎌倉建長寺第二世佛光禅師開基の精舎ゟあり本尊
釋迦如来ハ行基大士の作服士ハ文殊普賢等なり昔ハ盛大の
寺院ありしゟ永禄年間里見義弘ゟ兵火ゟ罹りく灰燼とゝる
又此時當寺の鯨鐘をも國府臺の陣へ奪ひゝゟ誤く利根
川へ沈しゝとて今其處を字しく鐘ゟ淵と唱へり　國府臺の条下ゟ詳なり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用

船橋
意富日神社

意富日神社　意富日古八日を比よ作る天正以来船橋驛上總海道中台命おようて比を日よ改らるといへり

成田海道との岐道　五日市場村より宮居す世よ船橋大神宮

と称も延喜式内の沖神やゝく関東一之宮と崇む神官大宮司

富氏奉祀せり

當社大宮司富氏の始祖、景行天皇第四の皇子五百城入彦尊にして船橋より下向なしめ給ひ東國八十八村の縣主悉當宮の神官を司らしめ給ふ、然るに仁平の頃、荒木田滿國の舎弟基國を養子とす其後基継の時又嗣あるに依て千葉滿胤の子基胤を養子とす此時日月を以て家の紋と定む天正十九年辛卯大神君當社の神官富氏上意によりて若松より軍配團扇を添て献ず其後の若松の團扇よ根引の若松を添て献上せしより登城の役とす隔年二月年始より旧例よ任せ沖枝大麻よ根引の若松を永規とす

本殿祭神　天照皇太神宮　二座　相殿　左八幡太神宮　右春日大明神

豊受皇太神宮

延喜式神名記曰　意富比神社云云

茂侶神社　實録曰　貞觀五年五月二十六日戊子授下従五位下意富比神正五位上

又三代總國後同書曰　同十三年四月三日己卯授同神正五

二其

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

又同書曰　同十六年三月十四日癸酉授同神従
四位下
神寶叢雲御劔　長一尺五寸あまり来由ありと云ふ
神息劔　長一尺もそり日蓮大士の納らる
木劔　是も同し　大士の納らる
奉納ありしとなり
近衛帝宣ふ　仁平元年辛未六月十日船橋六郷の
地を寄附しなり
千葉介滿胤神領寄附状　附る由記せり其文曰東限覆宮塚南
限海西限洗川并杏懸北限石枝路とあり其餘應長應永享永禄文亀元亀
等の古文書多し姑是を省て記さず
家集　建保六年十月素還法師于時下総國ふさへりし
のりくさをそつゝみ久しくなれ天てる神もやすらふ
按ふに社記に実朝公寄附のあるを以て手続を記すなるへし
得ず一七日の間當宮より奉行の和尚ともそ来ふ時ハ是を
奉行の和尚ともそ来ふ其餘應長應永享永禄文亀元亀
亂行なりちくれ
常盤御宮　本殿の右神柿山の麓よ
東照大權現宮の御神
影及ひ大將軍秀忠公御木像日本武
尊の神像等を合て安座
慶歟伊勢宇基治天御大僧正とかふ勧請なりとの
都鄙より来りて敬拜す同夜近里の童
女集り廣前よりおのく唄ひ踊りつゝ
と歌ふ
天正九年辛卯當社造
営の時ハ初穂稲を
稲を和世と訓ふ例なりて稲を世
至り登穂の新稲を称ふ新嘗
るをもつてなり今世俗人
よ供
あり文字荷前よ作り
取て奉故に号荷前又三代実録
之早穂二十文云々又佳姫世記よ先穂
ハ初穂稲の訓
ハ初穂と云ふ
場よ唄ひ舞ふ習俗ありて則新
嘗の遺風なるへし
齋殿　同所大宮司の構よ傍てあり　御饌殿　同所供
當宮のものゝ勤なり　御湯殿の南進の都場なり
社記曰景行天皇四十年皇子日本武尊東夷征伐の勅を奉り発向
しまの頃此地よ於て伊勢大神宮へ凶徒調伏の御祈誓ありそれハ
其時海上よ光を現し一ツの船の中よ神幣を採添る弱木よ一面
の神鏡の懸れるあり尊是を得あひ則大神宮の御正體とし
夏見郷よ宮殿を建て崇まつりるよ

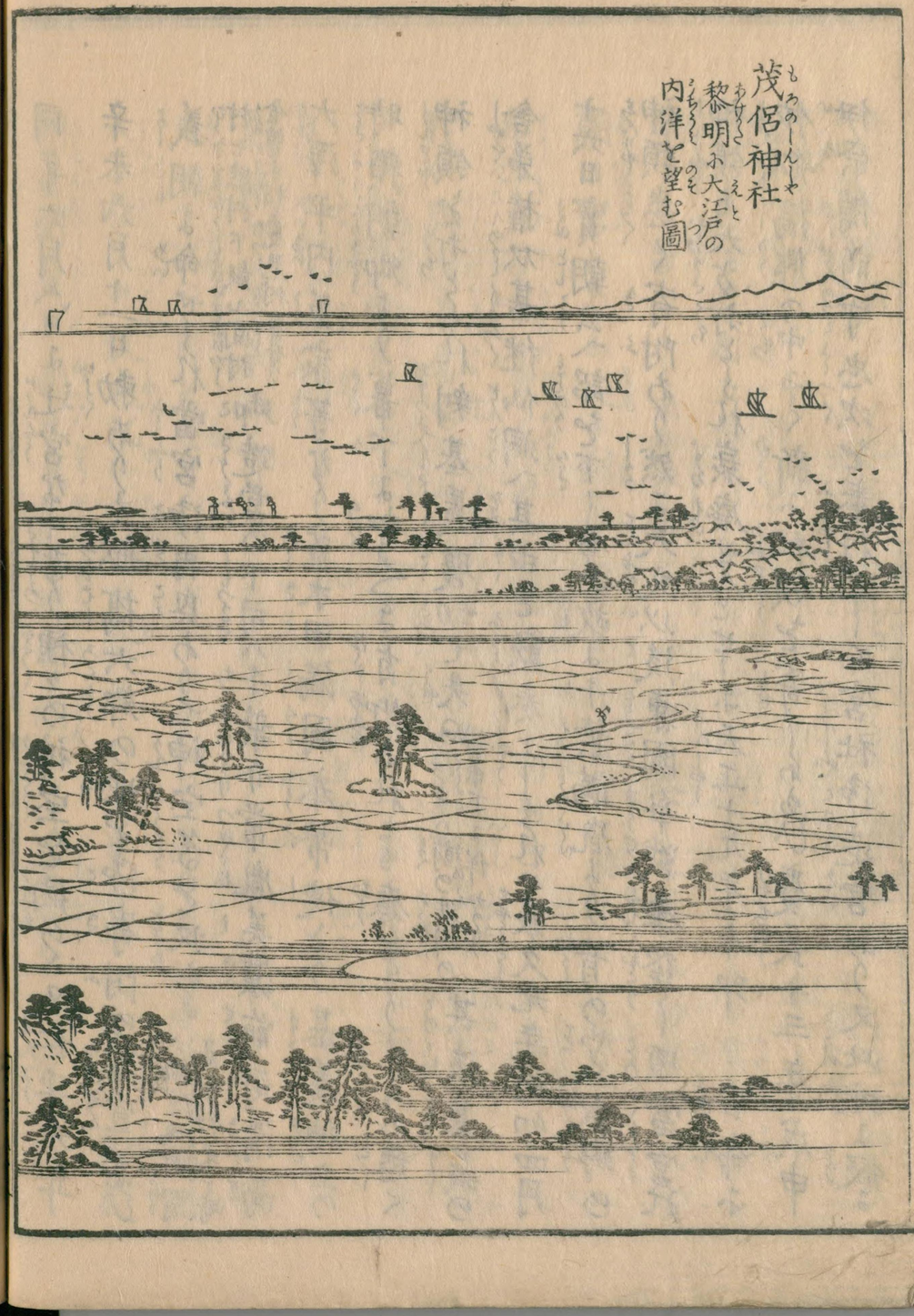
意富日神社（おほひのかみやしろ）
九月廿日祭礼（まつり）之圖

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　ガラス使用

…海上の光りおつのく者を…
九日市場村よ…同時に…
…渡齋海神社…
と號けく共よ當宮の神へ…
我を是伊勢國五鈴の川上より天降る神あり今ありを其神垣と
等しく崇へーと云云依尊其由を…帝よ奏しめしーうへ伊勢太神宮を
朝日宮とあるの夫よ對して當宮を…夕日宮と称しーまひ天皇第四の
皇子五百城入彦尊をしく船橋よ下向あさしめられ東國八千八
村の縣主兼當宮の神官たるーむ（當宮神官冨氏の始祖）其年新嘗の祭を行
後豊受皇太神宮を合祭しーまひ（其新穀を…地を今も清和天皇の
日の両神を勸請ありく三社とも（求る先村と名つくると云）二座とし又左右よ八幡春
貞觀十三年辛卯三月三日勅願ありく奉幣使下向ありく關
東一之宮の號を賜り同十六年甲午四月十四日再勅使下向ありて
天下泰平五穀成就の祈念を命せーむ天喜三年乙未源頼義
朝臣同義家朝臣東征の時寄願ありし當宮を修造ありく
同年六月六日よ遷宮なーまり種々の神宝を納らる又仁平元年
辛未六月十一日勅ありく船橋六郷の地を沙寄附の院宣をあひ
義朝よ命せられ當宮沙再興ありて神宝をを収らる
村七熊村下飯山間村（御造営の下司八千葉介常胤美濃前司清高
金曽木村夏見村等）大澤平内兵家等なり荒木田滿國奉幣使しう基義神主の
時頼朝卿より幕下よ加ふくさ肯仰あれとも應せざりしうハ悉く
神領を打とられ剰基義腰切て失ぬ（此川の前の洗川の…其後基義の
舍弟權ス基継仙洞へ其由を歎奏上しられハ兼久元年己卯四月
十六日實朝公へ詔を下しのみ故よ千葉滿胤より肯のめく六郷の
神領悉く寄附あり然よ天文以後東國爭戰屢發し頃當宮ハ
神領も大方打とられ衰廃せんとせふ天正十九年辛卯　台命よ
依船橋郷の中よく新よ社領を寄しめひ慶長十三年戊申
伊奈備前守忠次を奉行として宮社沙造営あり又此地よ假よ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　　ガラス使用

# 茂侶神社 黎明ヨリ大江戸の内洋を望む圖



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

御殿を建させられ時となりてこゝに入御ましく御崇敬尤厚く
御武運長久の御祈禱を命せらる始ハ神官冨氏の家を假の御旅
館となしたまひしが後ハ同所田中と
建地へ移し神官の家をハ同所田中と
宮営の御勤ハ神官冨氏へ賜はりしが再ひ元の社地へ還り住る
勤と唱へ宝暦十一年辛巳勅許ありて古往の例よ任せ毎歳
鶏鳴より御祓をなすことハなりぬ
鳳闕より御祓をなすことハなりぬ

當社の祭祀多きが中にも正月十六日の御神楽二月卯日の五
穀成就の神楽殊よ九月廿日ハ大祭にて其式甚古雅なり
前の日ハ角力奥祐あり此祐ハ天正十九年辛卯
東照大神君當宮へ御參宮の時 上覧ありしとぞ其余の祐ハ洩せり

## 茂侶神社 意富日神社の摂社にて

東の岡よあり祭神ハ木花開耶姫一座なり故よ浅間山乃号
あり當社ハ延喜式内の御神にて葛飾郡二座の中なり御手
洗池あり今ハ民家の地よ入或人云茂侶神社ハ同郡小金領栗ヶ澤村よ
社司ハ支野氏祭神ハ日本武尊と云く

三代實録曰 元慶三年九月二十五日壬子授下
総國正五位下茂侶神正五位上云云

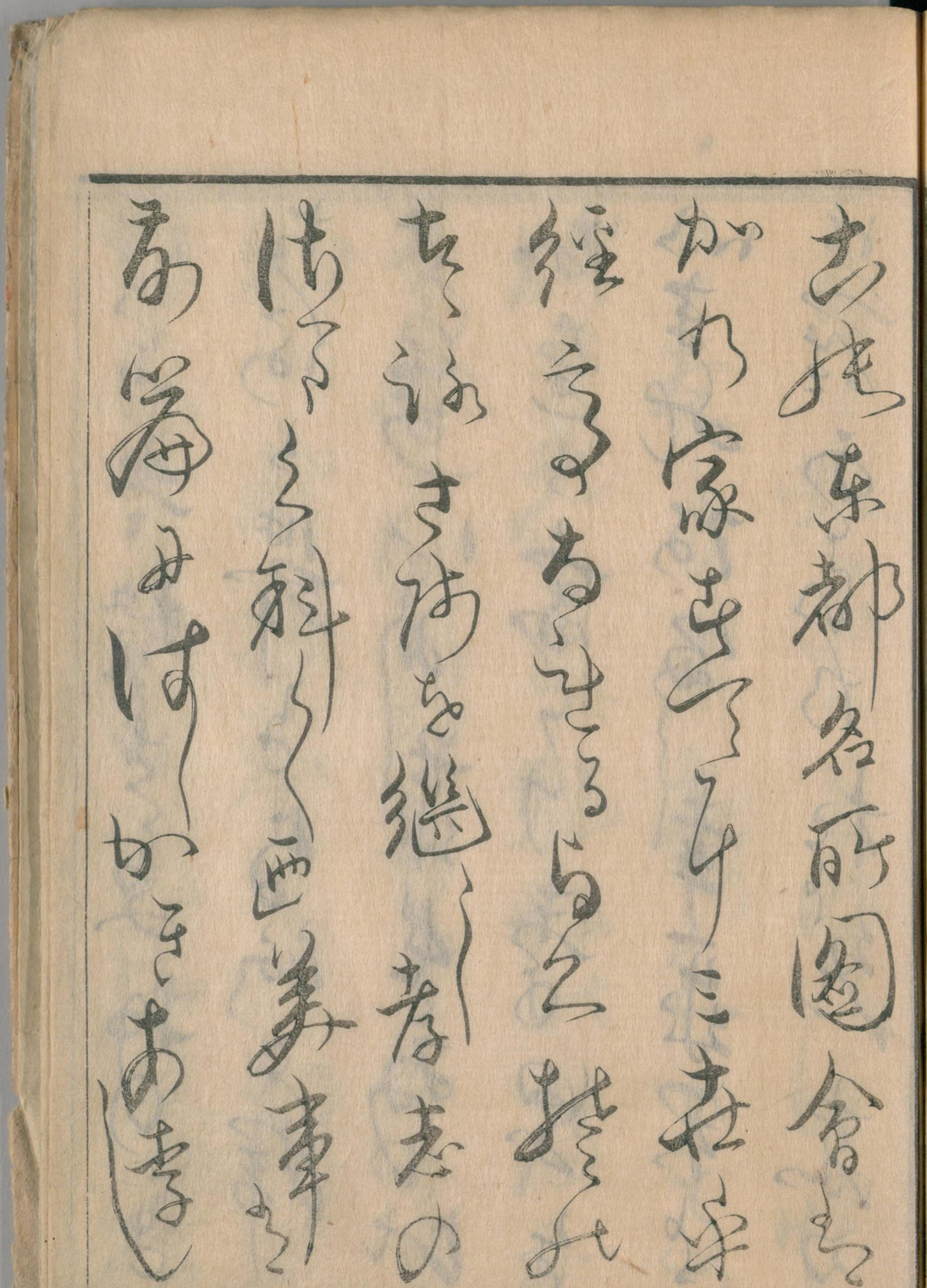
此社地ハ海濱よ臨たる砂山ゆゑく松樹繁茂せ西南の方
低く前よ南総の驛路を見下し後ハ岡續ゆゑく成田の街道
東北ふ続る富嶽の白雪房総の翠霞も共よ此地の
眺望よ入りく風光最秀美なり
(朱)「此の若松ハ當社の根の若松の枝を旧例とて
(朱)「毎年正月
(朱)「年始の時
(朱)「擇ミ取ることく
(朱)「なりぬ

例祭ハ六月一日よ行ふ

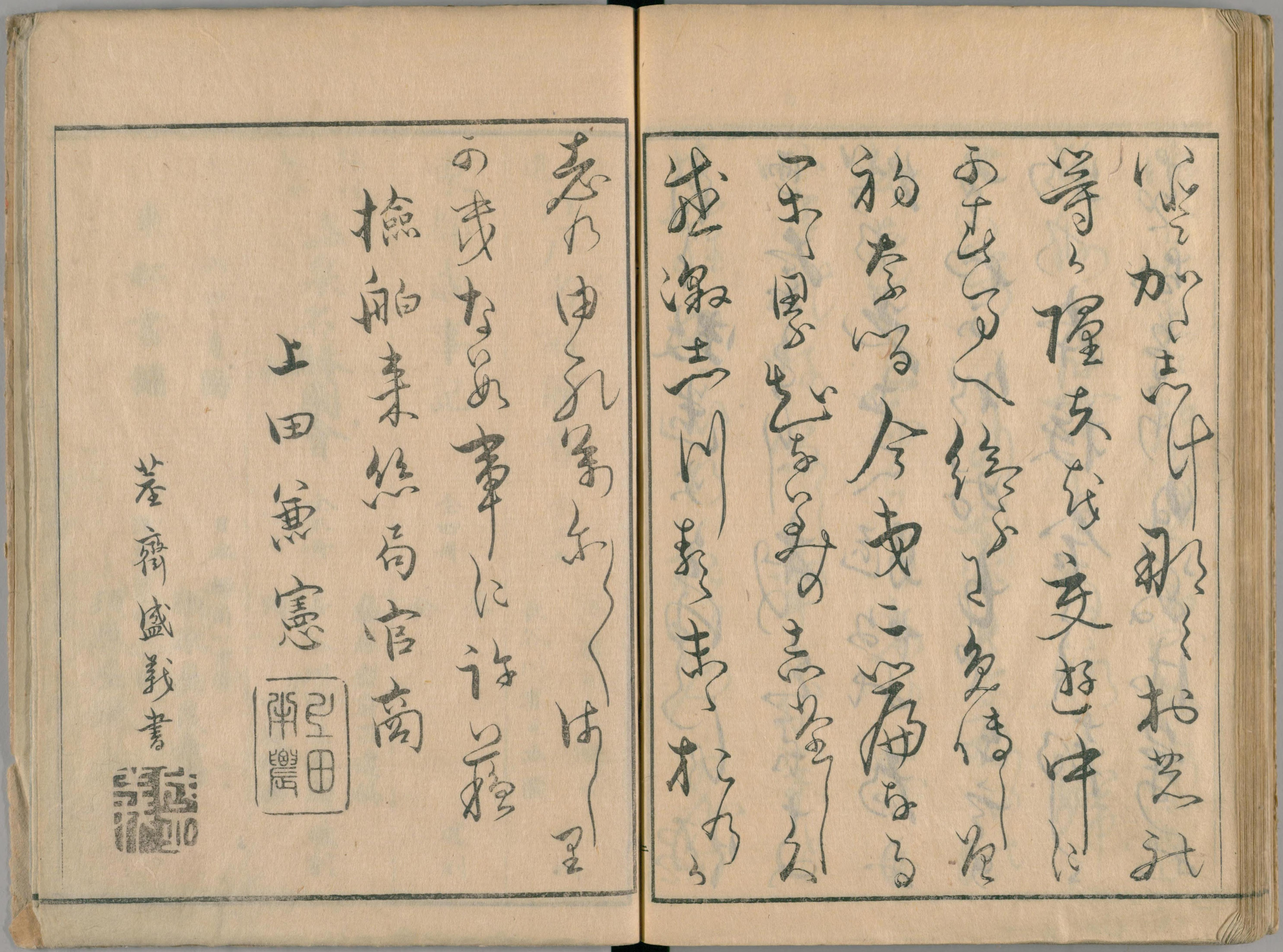


国立国会図書館 タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

編輯　松濤軒齋藤長秋
校正　男　藤原縣麻呂
仝　縣麻呂男　月岑幸成
畫圖　長谷川法橋雪旦
剞劂　東都　佐脇伊三郎
朝倉伊八
宮田六左衛門



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114　　ガラス使用




蒼龍齋盛義書

拾遺 江戸名所圖會 全五冊 齋藤月岑編述 近刻

東都歳事記 全四冊 全 長谷川雪旦画圖 近刻

箱根熱海 温泉名勝圖會 全三冊 藤原縣麻呂遺稿 長谷川雪旦画圖 近刻 同 雪堤補画

天保七丙申青陽

東都書舗 日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛
淺草茅町二丁目 須原屋伊八

国立国会図書館 タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

124
20
114

三都發
行書林

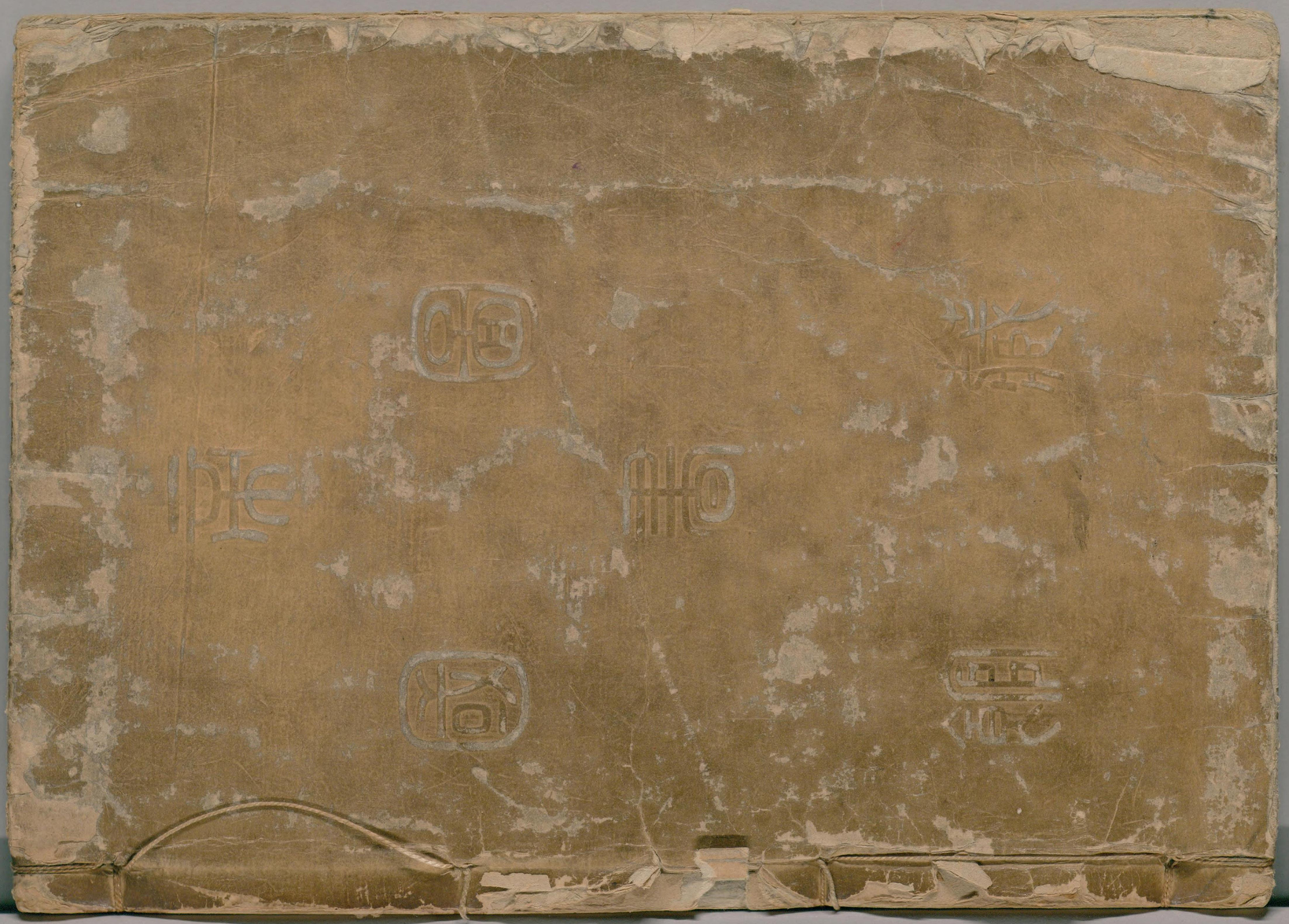
京都寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助
大坂心齋橋筋安堂寺町　秋田屋太右衛門
江戸兩國吉川町　山田佐助
江戸神田鍛冶町二丁目　北島順四郎
江戸淺草新寺町　和泉屋庄次郎
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
江戸日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
江戸今川橋本銀町　永樂屋東四郎
江戸日本橋通二丁目　小林新兵衛
江戸神田通新石町　須原屋源助
江戸日本橋通四丁目　須原屋佐助

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

124
20
114

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用